

明治六年の旅

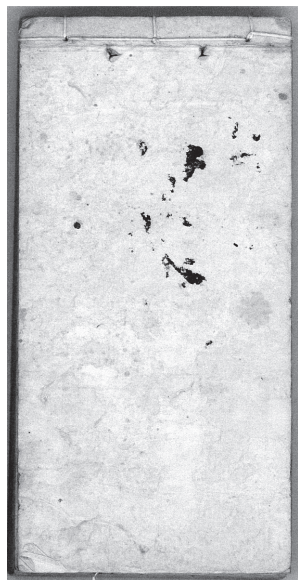


図2 裏表紙

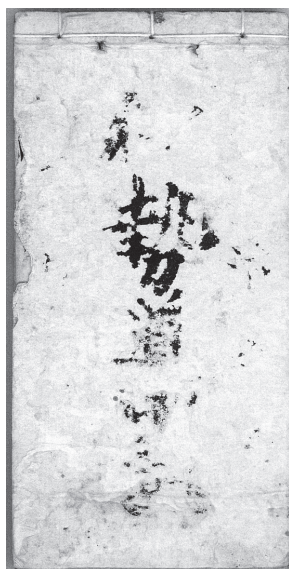


図1 表紙

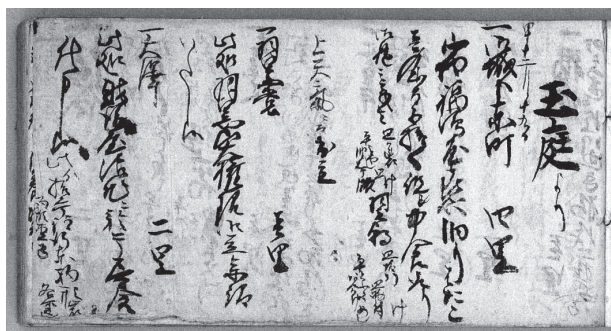


図3 本文冒頭

森川  
昭

## 〔解説〕

明治六年の旅日記を翻刻紹介する。原本は架蔵の横本一冊、九・〇×一八・二種、本文九六丁、うち白紙四丁、それに厚手奉書の表紙、裏表紙を付す。

表紙は旅中携帯のためのカスレがひどい。表紙は、中央に大字で「伊勢道中記」とほぼ判読でき、その左右に各一行小字の痕跡がある。うち一字は「治」のように見える。「明治」の「治」であろう。(図1) 裏表紙の中央に大字一行、右に小字各一行の痕跡がある。筆者の住所・氏名が記されていたのであろう。(図2) 本文冒頭に

玉庭より

申十二月十九日

一、御城下東町

四里

とある。(図3) 筆者は米沢の西四里に位置する玉庭(現山形県東置賜郡川西町)の人である。玉庭は山間の豪雪地であるが、米沢と越後を結ぶ街道の要地である。

「申十二月十九日」の「申」は明治五年のエトだが、明治五年は十二月三日が、明治元年一月元日に改まったから、出発の十二月十九日は明治六年一月十七日に当たる。本稿を「明治六年の旅」と題する所以である。それにしても新旧改暦の情報を、筆者はいっ、どこで得たであろうか。品川泊の条に初めて新旧両暦を併記している。ここで改暦の事実を知り得たのであろうか。とまれ、以後当麻、長池、醒ヶ井、妻籠、善光寺、関山、柿崎、内野、柴田、関、小国の十一回にわたって両暦を併記する。そのうち九回は旅

の後半それも、中山道に入ってからであることは、新暦の浸透度を物語っているのではなからうか。

この書の内容は次の通りである。

A、	出発から小国町までの旅の記録。……………	25	ページ
B、	「新潟より小遣口」。新潟以後の諸経費の明細。……………	81	〃
C、	「二月八日より遣口」。長池から新潟までの諸経費明細。……………	83	〃
D、	「記」。旅中二回の体調異変の記録。……………	85	〃
E、	「貸方」。「勝次」への貸し金のメモ。……………	85	〃
F、	「送り物」。旅中から国元への宅配か。……………	85	〃
G、	「払口記」。出発から正条宿までの諸経費の明細。……………	85	〃
H、	「錢（錢）別記」。貰った錢別の記録。……………	93	〃
I、	「越中富山茶屋」。この旅との関連不明。……………	94	〃
	「午」は明治三年、「申」は同四年か。……………		
J、	「記」。「勝次」への貸しのメモ。……………	95	〃

日記本文中に「拾貳人にて三百文」といった記事が四か所あって、一行は十二人であったことがわかるが、そのうち一人だけ名がわかる。その一人とは、EとJに金品貸借のことが見える「勝次」で、「正月

「廿日」、「二月廿一日」、「二月廿九日」の日付から、旅中のことと推定される。

A から旅程一覽を作製した。次の通りである。

年月日(旧曆)	宿泊地	料金	中食	評価	備考
五・二一・一九	米沢	一二五〇文		記載なし	
二〇	板谷	九〇〇文	○	上	
二一	八丁目	一〇〇〇文	○	記載なし	
二二	郡山	一二五〇文		上々	
二三	白川	一〇〇〇文		上々	
二四	大田原	八五〇文	○	下々	
二五	今市	一〇〇〇文		中	
二六	鉢石	一二〇〇文		上々	
二七	古峯山	二朱と二二〇文		記載なし	
二八	出流村	一〇〇〇文	○	下	
二九	藤岡	一〇〇〇文		中	
三〇	粕壁	二朱と一〇〇文		上々	
六・一・一	千住	二朱と四〇〇文		記載なし	

二	江戸	二朱と二〇〇文		記載なし	
三	同	(二朱と二〇〇文か)			
四	品川	一四五〇文		中	
五	鎌倉	八五〇文		中	
	江之嶋	五五〇文			片旅籠
六	大磯	二朱		中	
七	湯本	二朱と二〇〇文		大上々	
八	沼津	一〇〇〇文	○	中	
九	江尻	九〇〇文	○	上	
一〇	府中	一〇〇〇文		下	賄記載なし
一一	金谷	九〇〇文		下々	賄記載なし
一二	森村	一〇〇〇文	○	大極々上	泊るべし
一三	戸倉	一〇〇〇文		下々	
一四	門谷	記載なし		上	
一五	藤川	八〇〇文		下々	不可
一六	宮	一二〇〇文		下	
一七	桑名	一一〇〇文		下	

四	三	二	二・一	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八
丸亀	仏生山	切幡村	撫養	加太	粉川寺	河根	吉野	当麻寺	奈良	長谷	伊勢地	二本木	松坂	同	津
一朱	一〇〇〇文	一〇〇〇文	一二五〇文	一二五〇文	一二〇〇文	九五〇文	一〇〇〇文	一〇〇〇文	一朱と四〇〇文	一二〇〇文	一朱と一〇〇文	四〇〇文	九〇〇文	一両と二朱	記載なし
	○	○	○	○	○										
	中	下	上	上	上々	上	上	上	下々	大極上	大上々		上々		上
片旅籠。										菓子みやげ		片旅籠			

二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五
上ゲ松	妻籠	細久手	加納	醒ヶ井	守山	同	同	京都	同	同	大坂	長池	正条		
一朱と一〇〇文	一朱と二〇〇文	一朱と一〇〇文	一朱と三〇〇文	一朱と三〇〇文	一〇〇〇文			一〇〇〇文			二朱と二〇〇文	一一二〇文	一朱と三二五文		一歩と四〇〇文

○

○

○

記載なし

中

上

上

上

上々

大極上々

上

中

中

同

市内見物。

芝居見物。

市内見物。

船中泊。

〇〇文。

船中泊。他に布団代一朱と四

二一	贄川	一朱と二〇〇文	○	上々	
二二	会田	一〇〇〇文	○	上々	茶菓子出る
二三	善光寺	二朱	○	上	
二四	関山	九〇〇文	○	上	
二五	柿崎	一〇〇〇文		中	
二六	出雲崎	一〇〇〇文	○	中	賭記載なし
二七	内野	九〇〇文	○	上	
二八	新潟	二朱と二〇〇文			記載なし
二九	新発田	九〇〇文	○	大極上々	
三・一	関	一〇〇〇文	○	上	
二	小国町	九〇〇文	○	記載なし	

旅のコースは、おおかた当時東国の旅人たちのそれと一般である。川西町長原田俊二氏および同町の方々のご教示によれば、『川西町史』(上) 八六ページ以下に、

伊勢の崇敬が盛になるにつれて各村々に「伊勢講」が組織され毎年講の代表が代参する方式をとっていた。これらの人々が毎日の道中を記録したものは各地の古い家に見ることができる。また単に伊勢参宮だけでなく、この機会に上方を見物しようとして奈良京大阪を廻り、往路は東海道を桑名から伊



勢路に出て帰りは中山道を信濃から越路へ出て小国から置賜に入るといのが順路のようになっていた。

とあり、元禄四年、天明六年、文化三年の旅日記の概略が紹介されている。

今回の明治六年の旅日記のコースの特徴は、日光のあと難路を古峯神社に参詣して古河にでていこと、高野山のあと和歌山の西の加田から海路阿波の撫養に渡り、さらに大坂峠・日下峠の難路を越えて金毘羅参詣をしていることである。

古峯神社参詣は、架蔵の明治七年鶴岡の人の旅日記にも見える。原田町長のご教示によれば、同神社は火伏せの神として現在も信仰されているという。

当時の金毘羅詣では、大坂辺から船で渡り、帰路も船で中国路に渡るのがふつうだが、どうして難路の大坂峠・日下峠をこえたのか、不思議である。

旅籠の料金は金貨、銅貨のみで、銀貨は使用されていない。金貨と銅貨の換算は微妙なので、銅貨(文)で記録された四十二泊分、合計四三三二〇文から、一泊一〇三六文になる。文化、文政期の約二〇〇文の五倍強となり、幕末・維新期の物価高騰ぶりが如実に反映されている。一番高いのは品川の一四五〇文、一番安いのは藤川の八〇〇文である。

宿、福島屋喜六。泊りはたご壹貫貳百五拾文。但し中食取り。(米沢)

のように、「中食取り」がしばしば出る。これは旅籠屋で中食(弁当)を用意してもらったのであろうか。

念のため料金一覧表に○印を付けておいた。

面白いのは、旅籠屋に評価を与えていることである。現代でいえば☆☆☆とか☆☆☆とか☆☆☆とかがいうところであろうか。成績は次の通り。

大極々上	一
大極上々	二
大極上	一
大上々	二
上々	九
上	一七
中	一二
下	五
下々	五

大極々上は遠州森村、下々は大田原・金谷・戸倉・藤川・奈良である。金谷では「扇屋惣十郎泊り。旅籠九百文。下々宿。但し宿は小ざわやへ泊るべし」とほかの宿に泊るよう教訓している。逆に、大極々上の森村の大黒屋源五郎の場合は「此宿へ必々泊るべし」と、将来旅する人のためにすすめている。評価の基準は必ずしも料金の高下だけではないらしい。同じ料金でも評価が異なることもあるし、料金の高下と評価が逆転することもある。評価の基準は書いてないのが普通だが、一か所だけ、大上々の湯本の場合、

福住久蔵泊り、旅籠式朱と式百文。大上々宿。此宿上々にて、家も、畳も、賄もよし。出湯きれいに、式間四方の内湯有。此処へ九つ時着致し、緩々入湯仕、誠に宜所也。参詣の人々沙汰いたし、必々泊るべし。

と理由をあげてほめちぎっている。上々の粕壁では引物・二の膳がつき袋入りの盃をみやげにもらっている。大極上の長谷でも菓子をみやげにもらっている。

この旅日記の最大の特徴は、毎日の夕朝の食事の賄（献立）が記録されていることである。記録のないのは、江戸の二泊、府中、金谷、丸亀からの船中二泊、大坂の三泊、京都の三泊、出雲崎のみである。ここから当時の旅人の食膳が具体的に浮かび上がってくる。伊勢山田の御師の食事の豪華さはつとに有名で、高野山がこれに次ぎ、あとは粕壁の二の膳付きのほかは、すべて一膳飯である。図3で見るとおり、

右上に「皿」

左上に「平（平皿）」

中央に「皿（小皿）」

右下に「汁」

左下に「飯」

と、食膳上の配置通り記されている。いわゆる一汁二菜（小皿をカウントすれば三菜）の一膳飯である。広重の保永堂版東海道五十三次赤坂宿の絵で、女中が左右の手に一膳ずつ持ってひざまづいている。あれ

で二人分なのである。ちょっとわびしい気もするが、江戸庶民の日常が一汁一菜であったのに比べれば、豊かな食膳といえる。なお、藤川以後は汁と飯が書かれていないが、これはもちろん出なかったのではなく、同じ事のくりかえしを避けて省いたのである。

食膳にはどんな物が出たのであろうか。皿と平皿に登場するすべての食材を列举してみる。和え物の場合は、たとえば独活・大根・人参の和え物は、その三品を別個にカウントした。十回以上には○印を、五回以上には△印を付した。

#### 「皿」と「平」の食材一覧

かれない、△塩引、○まぐろ、もやし、○油上げ、○豆腐、ざこかれいは、○いも、切干、玉子、△生こん、○青菜、△のり、ふ、つきこん、△かんぴう、○しいたけ、○大根、○ねぎ、はよ、ゑび、ゆわし、丸ふ、なまり、△かつ、○にんじん、△干子、いり、△切こんぶ、花ふ、△丸ふ、つぶつぶ煮、ご切り、△寒豆腐、かつのこ、○はんぺん、まめ、数の子、あさり、△せり、大ゑび、角ふ、かい、焼豆腐、ゆり、△黒だひ、糸こん、こんぶ、○牛房、干あゆ、なます、もくそく煮、そく煮、むきみ、かまくらゑび、白魚、はまぐり、△生が、△干大根、このしろ、ゆば、かひやき、△うど、くじら、かつ魚、たこ、さとうかんてん、みかん、ぼら、青のり、切ふ、白こんぶ、たひ、あを、たけの子、焼はんぺん、しひら、色はんぺん、ひぢき、大角豆、いかな、ひらさき、わり干、さつこ、ふな、しぢみかい、焼玉子、つきこん、切いか、ます、ふき、たら、ぜんまい、まいたけ干。

膳の中央の皿(小皿)は、大こん(大根)が大半だが、稀に、からし菜、梅付(梅漬)、青菜、かぶづ

け、青菜くるみ和え、かづの子、大根付（漬）、おろし、生が、大根赤づけ、生があまづけが見える。

汁はただ「汁」とのみで、実を記さないのが普通だが、ごく稀に大根、豆腐がある。汁でなく吸物が一回だけ出て、その実は「ゆば」である。

食材は、季節がらもあって、大根・豆腐が圧倒的に多いが、まぐろが十三回も登場するのは、まぐろが現在ほど珍重されない、いわゆる下魚であったからであろう。白魚、はまぐり、いかなごなどは、それだけで土地が大体わかりそうである。

旅の楽しみの一つは、土地の名物を食することであろう。この道中記には次のような物が出てくる。

李平の切からし、高倉の納豆汁、鏡沼の保冬酒、旧来石の鰯汁、さかいのだんご、柏原の白酒、岩淵の栗子餅、丸子のとろろ、宇津谷の十団子、小夜の中山の飴の餅、日坂のわらび餅、明星の湯てん、三輪の素麺、一の谷のあつもりそば、寝覚茶屋のそば切、馬場峠の柏餅

前記「内容」一覧のうち、B、C、Gは旅中諸経費の明細である。何故か旅程の逆の順になっている。まずB、C、Gを合計してみると、

五両

四六歩

一一八朱

一〇七八一一文

となる。兩・歩(分)・朱はみな金貨だから、一兩 $\parallel$ 四歩 $\parallel$ 一六朱で換算すると、二八兩一步一朱になる。問題は金貨と銅貨の換算で、これは日々・場所によって変動するが、本文中一か所、四国の仏生山の条に、

此処兩替は壹兩七貫五百文なり

と、金貨・銅貨の換算比率を書き記している。これをもとに計算すると、一〇七九一一文は一四兩二九一一文になる。これを加えると、

四二兩一步二朱二八一一文

が七十二日間の旅の諸経費の全体である。

これに対して収入というのも妙だが、贈られた饞別がHの「錢(饞)別記」である。三十五人から贈られ、金額は合計十二兩三步と三九〇〇文、それにわらじ二足と気付薬一貝と御守である。一人だけ金額欄が余白のままのがある。文七の十兩はべつにして、一 $\sim$ 二朱が普通であつたらしい。

饞別に対しては当然お土産を用意することになる。それは各地の名産であつたり、寺社のお札であつたりする。京都で扇子四十本をまとめ買っているのは饞別の送り主の人数にほぼ該当する。各地で風呂敷を計十六枚もかっているのや、「ゑづ」おそらくは錦絵もみやげであつたかも知れない。

なお、津の条に「此処は米壺両に式斗なり。酒は壺升八百文なり」とあるように、米と酒の相場に関する記事が、津、長谷、奈良、吉野、撫養、仏生山、赤穂、細久手（米のみ）、善光寺（酒のみ）と九回も出てくる。筆者は商業の人、それも酒造家ではなからうか。

この道中記の魅力は、明治六年という時空にある。明治新政府が発足して六年、旧体制から新体制への激動期である。その中を玉庭の旅人たちが行く。彼等は何を見、何を感じたであろうか。

五年前の戊辰戦争は、その痕跡をあちこちにとどめている。新政府軍と奥羽越列藩同盟軍との間に激戦が行なわれた奥州街道沿いには、その戦死者の墓が点在していた。三か所につきのような記事がある。

式本松（寺の）外に戦死の供養塔有。

矢吹 白川入口、会津海道出会の追分ヶ有。又御塔ばに戦死の供養塔有。何れも戦死場也。

白川 町はづれに戦死供養の塔有。左には薩州、長州、大垣戦死なり。

薩州、長州、大垣はいずれも官軍である。ここには当時賊軍の汚名を着た米沢藩の領民であった筆者の思いがこめられているのではなからうか。ともあれ、官軍であれ、賊軍であれ、戦争の犠牲者はいたまじい。官軍の一翼を担った大垣藩の藩主の直系に当たられる、戸田香代子さんは、毎年大垣藩士の墓を巡礼しておられる。故郷を遠く離れて路傍に眠る大垣藩士の霊にとって、何よりの慰めであろう。私は某年その巡礼に随行して、感動に胸を熱くしたことであった。

戊辰戦争のつめあとは「江戸」にもあった。江戸見物の第一日の「東恵山宮様御殿焼跡茶店多し」は上

野の彰義隊の戦争の焼け跡であるが、その周辺には早くも多くの茶店が店を開いていた。

散髪脱刀令が出たのは明治四年八月のことであり、天皇自らが率先散髪したのは明治六年三月のことであった。わが玉庭の旅人たちは頭にチョンマゲをのせていたであろう。「髪結」の記事が六回、びんつけ代が二回出てくる。

廃藩置県の詔が発せられたのは明治四年七月のことで、同年末までには従来の三六一藩が三府七二県にまで統合整理されていた。しかし、玉庭の旅人たちの意識は旧体制のままのようである。日記は冒頭いきなり「御城下」で始まり、二本松は「拾万石御城下」であり、白川も「拾万石御城下也」であり、古河は「土井大炊守殿城下なり」であり、明治元年に「東京」と改称された江戸は、以乘五年を経ているのに依然として「江戸」である。前記のごとく、出発時すでに新曆に改まっているにもかかわらず、日付は旧曆で通している。旧体制の創始者である家康を祀る日光の描写は群をぬいて精細をきわめ、讃仰の念すら感じられる。

一方、文明開化と玉庭の旅人たちはどのように遭遇したであろうか。Gの「払口記」の「江戸」（玉庭の旅人にとってはあくまでも「江戸」である）の滞在中の記載を、煩をいとわず全部引用してみる。

一、式朱と百文 旅籠

一、四百文 人力車代

一、式百六十文 中食料

一、百文 たばこ



一、壹朱と百文 ぞふり壹束（草履壹足）

一、貳百四拾文 中食料

一、貳朱と五百文 たび壹束（壹足）

一、八十文 見物料

一、五十文 湯ぢん（湯賃）

一、壹歩と四百文 江戸旅籠

一、貳百五拾文 酒壹合

一、三朱 菓子料

一、一步と三百文 かんざし

御□ひ 色々

はみがき

一、貳百四拾文 中食料

一、貳百文 も、引駄ぢん

一、三貫五百三拾九文 ゑづ代（絵図代）

一、貳歩三朱と四百拾五文 も、引仕立賃共に一式

一、五百九拾三文 品物送駄賃

一、三歩貳朱と百六拾五文 メリヤスも、引

一、二両二歩

とんび

一、式百文

もぎ紙代

一、百文

ろふそく代

一、壹歩壹朱

上騎車（蒸気車）賃銭

最初の「旅籠」は千住であろう。最後の「上騎車」は品川発だから、その間が「江戸」の記事ということになる。「壹歩と四百文 江戸旅籠」は馬喰町の米沢屋の二泊分だろう。ちなみに、馬喰町の旅籠米沢屋は、その屋号からして米沢出身者の営む旅籠屋で、米沢人が出府の際の定宿であったのだろう。

さて、玉庭の旅人たちは、草鞋を草履にはきかえ、足袋も新調し、これも新調のメリヤスの股引をはき、着物の上にとんびを羽織り、絵図を手に、人力車に乗って江戸市中を遊覧した。

日本人は江戸時代二世紀半、人間一人を人間二人で運んでいた。駕籠である。その非能率を誰も気づかなかつたのであろうか。明治とともにそれが一変した。人力車の登場である。玉庭の旅人たちは、江戸滞在の二日間とも人力車を利用したらしい。江戸滞在中「案内銭」もしくは「案内賃」が一度も出て来ないのは、人力車の車夫が案内役をも兼ねていたのであろう。人力車は旅中もう一度、伊勢山田とおぼしきところに、「四百文 車乗代」として登場する。急速な普及ぶりがかがわれる。

「とんび」を二両二歩という途方もない高価で買った。とんびは鳶合羽の略で、『日本国語大辞典』に「袖が幅広く長い厚地毛織物製の外套。二重まわし。インパネス。」とある。その袖を鳶の羽に見立てたもの。幕末にあったが、明治になって爆発的に流行した。仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』六編の玉川亭香

魚の序文に「彼（馬琴）は紙鳶とんぼがたこの器械に乘じ。是（魯文）は風衣とんぼがたこの旅服を調せり」と記し、おなじく九輯の「西洋紀元一千八百七十一年九月」と新奇の西曆を掲げた倭屋琴語の序文のあとに、写真狂人北庭菟久波は「仕て見たき事の品々」の中に蝙蝠傘、長杓、気球船、洋髪頭、シャボンなどとともに、「人力車に駕のりてばか囃子」と「風衣とんぼがたこを着て中宇ちゆううを俗俣さますよひ」をあげている。玉庭の旅人たちはそういう文明開化を存分に体感した。

三貫五百三拾九文も出して「ゑづ」を買った。これは、横浜とおぼしき部分の「異人ゑづ」を勘案すれば、地図ではなく絵画であろう。江戸名物の絵画、すなわち錦絵を何枚も買ったのであろう。

チョンマゲ頭の玉庭の旅人たちは、最新流行のとんびを羽織り、最新流行の人力車に乗って江戸を遊覧したのであるが、そのコースの中に、「ほてる管」がある。これは築地ホテル館のことで、旧幕時代の慶応三年に着工し、明治元年に竣工した日本最初の洋風建築であった。一〇二の客室を持つ堂々たる二階建ての洋風建築で、細部には日本建築の手法を用いていた。（東京市史）東京の新名所として数多くの錦絵が描かれ、そのうちの一つには、ホテル前の海上に「CITY／OF／YEDO」の船名を記した外輪船が航行している。玉庭の旅人たちがこの築地ホテル館を実見したのであれば、他の例のごとく「美しく結構」と書いたであろう。「ほてる管」とだけそっけなく書いたのは、同館が前年明治五年二月の大火で焼失してしまったからであろう。玉庭の旅人たちは、錦絵を手人力車の車夫からその偉容を説明されたのであろう。

今までに買い求めた品物などを、五百九拾三文払って、いわば宅配で郷里へ送って身軽になった玉庭の

旅人たちは、品川に一泊のあと、文明開化との遭遇のクライマックスを迎える。蒸気車である。

日本最初の鉄道は、明治五年八月七日に品川・横浜間が開通、同年九月十二日に新橋・横浜間が全面開通、明治天皇臨席のもと盛大な式典が催された。それからわずか三か月余、早くも乗車の機会に恵まれたのである。その様子は、

此処町入口八つ山と申処より、上騎車（蒸気車）に乗。ぢんせん（賃銭）壹人に付壹分壹朱宛出し。  
横浜迄七里場所、半時に参り、誠に面白き事也。

料金は一人一歩一朱。品川・横浜間の料金は上等九十三銭、下等三十一銭であったから、玉庭の旅人たちは下等に乗ったことになる。明治四年五月十日に新貨条例が制定されているが、玉庭の旅人たちは旧貨で乗っている。経過措置として、新旧両貨の併用を認めたのである。品川・横浜間七里を半時（約一時間）、途中川崎、鶴見、神奈川での停車を考慮すれば、時速三十キロぐらいか。さて、玉庭の旅人たちの感想は「誠に面白き事也」であった。

文明開化の窓口、横浜では、

案内者人取り、三百文宛出し、町中見物。異人管（館）より、ふらんすの王様の宮参詣。是は美し敷結構、筆に難尽候間、見物致すべき名所也。

「ふらんすの王様の宮」はフランス領事館であろうが、玉庭の旅人たちの目には、それが宮殿のように美麗に見えたのであろう。G「払口記」によれば、二朱で「異人ゑづ」を買っている。紅毛碧眼の西洋人を描いた錦絵であろう。

江戸・横浜を通じて文明開化への拒否反応はまったく感じられない。

玉庭の旅人たちはもう一度文明開化に接している。こふべ（神戸）である。

此所は異人高易場（交易場）相立、横はままがい、誠に宜敷也。是より大坂へ十里の海上、上気船（蒸気船）、壹人分壹歩宛出し、八つ半時乗出し、七つ半時（二、三字分余白）壹丁目上気船乗場へ上り

異人との交易場も立ち、横浜そっくりで「誠に宜敷也」で、そこから大坂まで十里の海上を、料金は一人一歩、約二時間で着いている。神戸・大阪間には、早く明治元年四月から「ストンボ」（スチーム・ボートの訛伝）と称する小蒸気船が運航されていたという。（神戸市史）

文明開化、異文化との遭遇のみならず、街道の風物にも変化が見られた。往来の旅人たちに恐れられた箱根の関所は、早く明治二年に廃止されていた。歩行渡しであった安倍川には橋がかかり、「越すに越されぬ」と唄われた大井川は舟渡しになり、便利になったが、それぞれ橋銭四十文、舟賃一二〇文が必要になった。明治元年にはじまった新政府の神仏分離政策の影響か、秋葉大権現は「別当不相極処にて」お礼を請けることもできなかつた。伊勢の宮川の渡し船はもともと御師のサービスで無料であったが、「御一新」以後は有料四十文になった。この「御一新」という新語は同じ伊勢の天の岩戸や奈良の鹿寄場にも出てくる。その天の岩戸も新政府の方針で聖地化されて参詣できなくなつた。あの弥次さん喜多さんも銭を投げて興じた、間の山のお杉、お玉も姿を消していた。新時代の波は街道筋にも押し寄せて来ていた。

さて、四日市の西、日永の追分から伊勢街道に入り、津に一泊、翌日明治六年一月十九日、津の西外れ日本の追分にさしかかった。右に分かれるのが伊賀上野・奈良を経て大坂に至る、いわゆる伊賀越奈良道で、今も立派な道標や常夜灯がのこっている。芭蕉も何度か通った道で、私もこの追分にたはずんで芭蕉の面影を偲んだことがある。玉庭の旅人たちはここで思わぬ人に会った。はるばる大坂からやって来て、伊勢参りの旅人を待ちかまえていた、旅籠屋の客引きである。

此処、追分 なら越

いがごひ（伊賀越）

但し、此処へ大坂宿大和屋弥三郎と申宿引参り居、御神酒として酒三盃程、肴拾貳人へ出し、御馳走に相成、荷物等も相送り申候。

「これはお神酒ですから」と酒を三盃、それに肴までご馳走になってしまつては、トリモチにかかった鳥も同然である。荷物なども預けるはめになった。結果的には身軽にもなれたし、二十日後に宿泊した大坂の大和屋弥三郎は上宿であった。

金森敦子氏『きよのさんと歩く江戸六百里』によれば、伊勢参宮の人達の多くが、参宮後京・大坂に向かうことを知っていて、京・大坂の客引きたちが多く桑名や伊勢にやって来ていたという。荷物を預けて身軽になりたい旅人にとつても、客を確保したい旅籠屋にとつてもメリットのあるシステムであった。月本にもそういう客引きがいたのである。

旅の楽しみは、神社・仏閣・名所の参詣見物、名物の試食である。そのほかに芝居の見物がある。玉庭の旅人たちは旅中二回芝居を見ている。まず丸亀の船で天候待ちの間、陸に上がって、「芝居見仕候」。これは大したものではなかったらしい。Gの「払口記」には「四百四十文 芝居木戸銭」とあるのがそれに該当する。二回目は芝居の本場大坂で、旅籠大和屋の手配で大芝居を堪能した。木戸銭もぐんと高い。

翌日頭とん堀（道頓堀）芝居、角にて大芝居見物。宿任せにて、壹人分二歩二朱宛出し。誠に目を驚し申候。

佐藤悟氏のご教示によれば、明治六年大阪中の座の演目は、奈河篤助作『けいせい齊佳節なつみのせつ』で、これは江戸時代初期の天草の乱を材としたもので、市川右団治、片岡松太郎などが出演していたという。

玉庭の旅人たちの旅は、まことに健全なものであった。遊郭に上がって云々という記事はまったくない。府中（静岡）では二丁町について「古吉原 江戸吉原にもまさるなり」とその繁栄ぶりを記し、京都では「島原けひせい（傾城）見物」とあるが、登楼の形跡はない。ただ一か所B「二月八日より遣口」の細久手と上ゲ松の間とおほしきあたりには、「式歩三朱 玉代」とあるのは何か。玉代はおそらくギョクダイと読み、遊女を呼んで遊ぶための料金であろう。前後の旅籠賃の十倍近い高額である。三行前の「壹貫百式拾五文 半ゑり代」もあやしい。しかし、それにしてもすぐあとに「四十文 いも」とあるのはいかにしてもつや消しである。

健全といえば、玉庭の旅人たちなかなかの健脚であった。Gの「払口記」に一か所「四百文 馬乗賃」

とあるのと、江戸遊覧と山田での人力車および船、蒸気車を除けば、ただひたすら徒歩である。一日十里くらいは平気で歩く。善光寺道の会田く善光寺などは、途中「立峠とて大峠誠に難渋なり」「馬場峠 大峠なり」と大峠を二つ越して十一里二十八丁を歩いている。

D「記」によれば筆者は旅中二度体調をくずしている。一度目は一月二十日雪中朝熊岳に登山して無理したためか、「廿一日気持悪く、大になづみ申候」という状態であったが、それでも朝はゆっくり五つ時（八時頃）出立、五里歩いている。駕籠に乗ったとは書いてない。二度目はもつとすごい。二月十一日大坂の「芝居場におゐて、目前（目まい）仕、半時程難儀仕候。い（癒え）申候は八つ頃（午後二時頃）」これは大変だ。高血圧ではなかるうか。にもかかわらず翌日は、途中男山八幡宮に十八丁登って、京都まで十二里を歩いている。あきれぬ外ない健脚である。

〈付記〉

本稿を草するにあたり、川西町町長原田俊二氏はじめ同町の皆様方に、同地の地名、人名、習俗について懇切なご教示をいただきました。また、文明開化の諸事象については、延広真治から種々ご教示をいただきました。ともに記して深甚なる謝意を表します。



〔旅日記本文〕

玉庭より

申十二月十九日

一、御城下東町

四里

宿、福島屋喜六泊り。はたご壱貫弍百五拾文。

但し中食取り。御賄之義は、

皿「かれい」

平「もやし、油上げ」

皿

汁

飯

翌朝、皿「塩引」

平「とふふあんかけ」

皿「梅付」

汁

めし

上天気にて出立。

一、羽黒堂

壱里

此所羽黒山権現御立。参詣いたし候。

一、大沢

二里

此処越後屋治作に於て昼食仕申候。此より拾二

丁程行東駒形岩名所有。駒形堂有。

十二月廿日

一、板谷

二里

此処に泊り、板井屋平七宿、はたご九百文、賄

之義は、

皿「まぐろ」

平「ごごがれいは、切ふ、しおで」

汁

飯

翌朝、皿「塩引」

平「とふふ」

汁

飯

但し上宿。中食取り。

一、彦沢

壺里

此処さいの川原と也。又壺丈程の地藏御立。夫

より式十丁程行、不動様御立。

一、李平

壺里

此所に切からし迎式軒有り。夏は名清水あり。

一、庭坂

二里

一、佐々木野

一里

一、福嶋

壺里

町はづれに須川迎有。橋錢二拾四文出し。右は

三万石御城下也。其より此前にふすおがむ丁有りねつこ町浅川新丁八幡

宮御立、但石壇百貳拾四有り。左に宝蔵有り。

並松有り。

十二月廿一日

一、八丁目

三里

中嶋屋喜七泊り。はたご壺貫百文。中食取り。

賄之義は、

皿 [塩引]

平 [いも、にんじん、切ふ]

小皿

汁

飯

朝 皿 [塩引]

平 [とふふ]

汁

飯

一、式本柳

此処大寺有り。廻りは石垣へ〔い〕脱か)に

て、並松植置。門有。門内に大桜有。能き寺

也。外に戦死の供養塔有。

一、二本松

一里

右は拾万石御城下。結構也。町中峠下り、御城

御手脇に、熊野山八幡宮二社御立。門前には石

鳥井、丸さは八尺廻り、高さは四間程有。はば

さは五間。其より石だん七拾六下駄。又赤門

有。又石だん三拾下た上り、右大臣左大臣の門

有。御本社大がらんにて、前には柏木式本に、

大桜、左には宝蔵、灯籠六つ拜殿はひだのたく

みの作り也。裏には穴有。誠に結構也。

一、杉田

壱里

翠朝 皿「塩引」

飯

汁「とふふ」

小皿「からしな」

平「玉子、とふふ、生こん、青な」

此間におんじやく町あり。

一、本宮

壱里半

小皿「青な」

平「あんかけどふふ、のり」

汁「大こん」

飯

中頃に板橋あり。此駅にて中食仕候。

一、高倉

壱里

但し上々宿也。

右入口に五百川連廿五間の土橋有り。夫より少

し行、浅香山辻茶屋四軒あり。納豆餅名物。代

銭百六拾文。其より日和田村、福原、宮田。

此処町はづれに切積上、柰木有。其より壱里半

程行鏡沼と申処に保冬酒あり。壱盃代三百五拾

文。酒はあまし。

一、郡山

二里

一、笹川

壱里半

十二月廿二日

河崎屋弥右衛門泊り。壱貫弐百五拾文。

賄 皿「まぐろ」

此処に川有。橋銭老人分三拾文出し、其より又

少し行、なめり川連大橋有。はし銭五拾文出

し。此辺に大將軍鎌足公御立。

一、須賀川

二里半

町は宜敷処也。其より行、旧来石と申処に鱈汁名物有り。代錢百文也。

賄 皿

平「ふ、つきこん、かんぴう、玉子、しひたけ」

一、屋吹（矢吹）

二里半

（此間、中畑新田、ふませ（踏瀬）、太田川、小田川の間に化ヶ地藏迎御立。是は仙代定飛脚小つふり左五右衛門と申人に切られ二つに成、半分は道に転び落申候。其より泉田、根田、大志津、夫より白川入口、会津海道出会の追分ヶ有。又御塔ばに戦死の供養塔有。何れも戦死場也。

朝

皿「まぐろ」

平「とふふ、ねぎ、まぐろ」

皿

汁

飯

一、白川

三里廿八丁

上々宿。

十二月廿三日

一、白坂

二里

拾万石御城下也。町入口には三拾一間板橋有。

町はづれに戦死供養の塔有。左には薩州、長

奥州、下野堺明神二社御立。さかいのだんご名物有り。代錢百文也。

州、大垣戦死也。はたご老貫百文。村上屋伝右

一、より井

沓里半

衛門。

此処に結構成つぽ有。此に高瀬、板谷、遊行

柳。

一、芦野

二里

右は三千拾六石、芦野采正城下也。那須野与市子孫と申す。

此間に寺子村と申処有り。其前にさい川迎有。橋有。拾五文出し。

一、越堀

二里廿九丁

此間に鍋掛川有。此処に橋有。廿文出し。

一、鍋掛

六丁

一、大田原

三里廿九丁

此宿町入口に川有。但此川は中川と申。橋せん拾五文いだし。

右は壹万石大田原出雲守城下也。町外より日光山道也。其より那須野ヶ原あり。氣を付て行べし。

十二月廿四日

きつこふや忠次泊り。旅籠八百五拾文なり。

御賄 皿 [はよ]

平 [とふふ、ねぎ、ゑび]

皿

汁

飯

朝 皿 [ゆわし]

平 [丸ふ]

皿

汁

飯

中食取り。但し下々宿。

此処町はづれに、池之弁天迎大社あり。氣を付べし。其より那須野ヶ原壹里半程行、追分に大

玉木あり。氣を付行べし。

一、うすば村 (薄葉村)

二里

此より少し行、ほふき川迎大川あり。

一、沢村

拾八丁

一、矢板

壹里半

一、高内

拾六丁

一、倉掛

二拾五丁

此処に荒川申大河あり。

朝 皿「干子、いり」

一、玉生

壹里拾四丁

平「とふふあんかけ」

一、船生村

二里

皿「大こん」

此処きぬ川迎大河あり。橋錢百文出し。

汁

一、大渡り

壹里

〔飯〕を書き落とし

此処町はづれに、今市より日光の追分あり。右

一、鉢石

二里

へ行ば近道有。此道は至て能き也。

十二月廿六日

五つ時着。油屋長三郎泊り。元名長左衛門也 壹貫弐百文。

一、今市

二里

上々宿。

十二月廿五日

上々宿。

傘屋金兵衛泊り。旅籠壹貫文。中宿。此間江戸

日光山入口に橋二つ有。一つはやますげの蛇

海道に出合申候。賄之義は、

橋。朱ぬり也。是は將軍様御社參の時御渡被成

皿「なまり、かつ」

橋也。長さ廿四間也。此川大谷川と申。橋根に

平「つきこん、にんじん、寒どふふ、青

深砂（沙）王御立。其より宮様の御本坊有。金

な」

剛童子奉拜。此処に日光膳と言大き成させる

有。又御道具入の御蔵四つ有。但し山役銭案内  
せん共に五百文出し。

一、伝教大師御立。此より宮様之御門、黒ぬりの  
門通り、百間余のかこひ、左は御殿地、其より  
石の鳥居也。

一、石の鳥居、丸は壹丈貳尺五寸、黒田筑前守御  
寄進なり。則高さは三丈貳尺、笠木長さ七間三  
尺余の御懸石也。

一、五重の塔、高さ三拾三間、酒井若狭守様より  
上り、拾二支の彫物也。

一、仁王御門、三つ棟作り。アウンの仁王。御丈  
壹丈貳尺疇朱なり。裏は金の獅子ほり物也。

一、石唐銅灯籠は、諸大名様より上候也。御神木  
ま木。

一、三神庫三つ。御宝蔵なり。大象の彫物あり。

一、御馬屋白木作り。猿のほり物也。

一、御水屋、石の柱拾貳本、金のかなく打浪飛竜

のほりもの、手水鉢は石にて四尺に九尺有。鍋  
嶋信濃守より上る。

一、二の御鳥居。

一、南ばん鉄の灯籠、仙台様より上る。

一、一切経堂、笑仏三像有。俗に笑堂といふ。

一、中段左右飛越之獅子のほりものなり。

一、琉球国より上る。三拾壹口の燭台有。

一、朝鮮国より上る釣鐘、虫食かねと言有。同国  
より上る廻し灯籠有。

一、おらんだより上る釣灯籠、何れも銘なり。

一、御本地堂、三河の国鳳来寺峯の薬師也。堂は  
八間四面惣朱塗ほりもの多し。

一、御廻廊うらの大ほりもの、松竹梅、孔雀、鳳  
凰、金鶏也。

一、陽明御門、四方唐破風、扇たるきに惣唐木壹

本木のほりもの、勅額かゝる。ばく、きりん、

らん、獅子、百鳥、百花、竜、天人、仙人、三

笑、四友、六侍、九哲何れも極さいしき、其外数を知らず、天井に古法眼元信、守信の竜有。八方四方白眼といふ。裏は風雷二神。この門を俗に日暮の御門と言。

一、御輿庫みこくら二季祭礼の神輿三社納れり。

一、唐御門惣唐木の寄木彫物、柱は登り竜下り竜、左甚五郎の作なり。ほりもの多し。屋根の上につゝ、がの虫つなぎ置けり。拜殿爰にて参拝す。

一、御本社御拜殿の間を御石の間と唱ふ。敷石は二重壘枚石。是を亀腹石といふ。結構恐多し。筆紙に尽がたし。百色の竜、百色の鳥、金銀花を堆朱つひしゅし、柱細工其外恐多ければ難述候。

一、玉垣四方、山鳥、水鳥、草木の分、不残両面の彫物也。

一、神楽殿、護摩堂、何れも同断也。

一、東西御廻廊二百間余、奥院入口ねむり猫と

申。御門、坂下御門、御廊下、何れも赤銅かわら也。

一、相輪塔、金唐銅、高さ三丈余なり。

一、日光現権御鳥居、三仏堂、御本社八方八つむね作り、中善寺と同神なり。

一、不動堂、是へ灯明錢五拾文出し、堂中参詣仕。中に神々御立被成候事、不数知候。此より三代將軍参詣。爰にて行ゑを着し登る。

一、三代將軍へ登る迄に、大門三つ通り、御本社へ参詣仕。此処の宜敷事は、東照大現権、日光大現権両社よりも、別而ひかりかゞやき、金細工彫物も増り、奥の院へ通る門迄見物いたし候処、誠に以目を驚し、筆紙にも難尽候間、御参詣の上、御見物仕可申候。此所加賀様御献上の金の天がい有。但し目方百弍拾貫有と申。

御賄

皿「まぐる」



平「油上げ、にんじん、いも、生こん」

皿「大こん」

汁

飯

朝

皿「にんじん、生こん」

平「とふふ、壺枚やき」

皿

汁

飯

但し、中食取り。

一、山窪村

壺里

一、黒川

二里

一、鉾岡村

壺里

是より少行、大川有。式拾七間大橋有。

一、古峯山

二里

十二月廿七日

賄の義は、

皿「生こん、油上げ」

平「にんじん、切こんぶ、花ふ」

皿「かぶづけ」

汁

飯

朝

壺「丸ふ」

平「つぶく煮」

皿「かぶづけ」

汁

飯

右別当着き、式朱と式百十文落物仕、其より五

十文出し、御札申受候。其より二拾二丁下り、

おさく山（石裂山）と言大峠越、山道にて誠に

以難渋仕申候。

一、栗野

五里半

此より峠壺つ越し、是も難渋仕申候。

一、粕尾村

壺里半

此処おもり川と申大川渡り、峠越にて永野村へ出るなり。

汁 飯

一、永野村

壺里

大川原通り、又峠有。其より出流へ出る。

此処より八丁登り行、入口に二王門御立。満願寺より切手取り、山役銭四百拾文出し、案内

一、出流村

壺里

十二月廿八日

岩本や与惣兵衛泊り。但し中食取り。但し下宿。はたご壺貫文。

壺人取り、其より寺裏には、坂東拾七番札所觀世音參詣仕。其より奥院三岩屋へ參詣いたし。抑此觀音は岩屋へ御立。難有事筆紙に難尽。其より又壺丁程登り、天道大日如来の岩や奉拝。又少し下り、大師岩やへ參詣。抑五百らかん御立。大師様湯殿山御写し。天がいの様躰、此岩や日本一の岩屋也。奥院大師様經文をとぐじゆいたし候処迄には壺丁程も岩屋也。誠に貴き事、筆紙にも言語にも不被尽候間、御參詣上可拝候。

賄 皿「ご切り」

平「にんじん、寒どふふ、かんびう、切こんぶ」

一、正雲寺

皿「大こん、な付」

汁

飯

朝

皿「にんじん、大こんなます」

一、くづう(葛生)

皿「にんじん、とふふ」

二里

皿

半里

此処町口より半道山へ、

一、琴平山

半里

琴平神社と申は御立。抑此神社は四年以来より別而御利益新た成故、日々の参詣人不数知。御本社は山の極みね。其所に鳥居、下には茶屋七間（軒）あり。御本社前には、石鳥居、灯籠六つ。御本社見事なり。門前には茶屋八間（軒）有。誠に結構成名所也。御参詣の御人は御廻り被成候也。

一、岩船

二里半

此地蔵様、二王門を通り、石壇有。御本社拾間四方。誠に大社也。前には唐金の灯籠六つ、三重塔有。随分結構也。

一、藤岡

二里半

十二月廿九日

藤屋与四郎泊り。壹貫文。中宿。

賄 皿「塩引」

平「油上げ、いも、生こん、かんぴう」

皿「かつの子」

汁

飯

朝 皿「かつのこ」

平「とふふ、ねぎ、かつ」

皿「大こん」

汁

飯

此間に川有。舟賃八拾文出し。

一、古河

二里半

右は土井大炊守殿城下也。足袋の出る所也。但し五万石也。町はづれ並松の間に、壹葉の松連名木有。氣を付て見るべし。

一、中田

壹里半

此処の町中に、大豆、こふやく、名法茶有。町はづれにぼふとうの渡り迎大川有。舟賃百三拾文也。

一、栗橋 拾八丁

此処に土手の粟餅迎名物有。

一、幸手 二里八丁

一、杉戸 一里半

此処町中に大橋有り。

一、粕壁 一里半

十二月晦日

此処上々駅なり。宿は国たや七右衛門へ泊り。

泊り二朱と百文也。上々宿。御賄の義、

皿「かんびう相物」

平「青な、かんびう、はんぺん、油上

げ、いも」

皿「大こん付」

汁

飯

朝 皿「塩引」

平「とふふ、のり」

皿

汁

飯

外に引物、二の膳

皿「まぐろさしみ」

ちよく「まめ、さとふ」

盃つ、袋入にして

一、大沢 三里

此処橋境にて町なり。

一、越がい（越谷）

一、摠荷（草加） 二里

一、千住 二里八丁

正月元日

中屋六右衛門泊り。式朱と四百文。

賄 皿「塩引」

平「青な、はんぺん、しひたけ、いも」

皿

朝 皿「数の子」

平「とふふ」

皿「な付」

此処より江戸見物第一始り。天王様、下屋（谷）

通り、東恵山（東叡山）宮様御殿焼跡茶店多

し。しのばずの弁才天、浦（裏）の大黒天王

寺、其よりどぶぐわん山（道灌山）、日暮の里、

あすか山、おふじ（王子）、此処に茶屋式軒有。

誠に結構也。必見物すべし。駒込吉祥寺、神田

明神、天下のせ道（聖堂）、神田目付（見付）、

馬喰町米沢や四郎兵衛泊り。旅籠式朱と式百文

也。其より浅草蔵前、観音参詣。裏の奥山誠に

結構也。一切経堂、五重塔、東本願寺、つきぢ

の御門関（跡）、ほてる管（館）、永代橋を越

ひ、深川八幡宮、両国ばし、是より宿へ帰り、

翌日鍛冶橋目付（見付）より、大名小路、大手

御門より、桜田目付（見付）、寅（虎）の御門、

あたご山、芝の増上寺参詣いたし、誠に見物結構也。

二月一日（新曆）泊り

一、品川

二里

正月四日（旧曆）

村田屋伝右衛門泊り。中宿。壺貫四百五拾文。

賄 皿「ねぎ、あさり」

平「はんべん、せり」

皿

汁

飯

朝 皿「とふふ、いか」

平「とふふあんかけ」

皿「大こん、な付」

汁

飯

此処町入口八つ山と申処より、上駱車（蒸気

車)に乗。ちんせん(貨錢) 老人に付壹分壹朱宛出し。横浜迄七里場所、半時に参り、誠に面白き事也。

一、横浜

七里

案内老人取り、三百文宛出し、町中見物。異人管(館)より、ふらんすの王様の宮参詣。是は美し敷結構、筆に難尽候間、見物致すべき名所也。

一、上岡

二里

此処にて中食仕申候。

一、鎌倉

三里

右は案内頼み、一人分四拾式文宛出し。

一、円覚寺 釈迦如来

右入口に門有。そばに白さぎの池有。此山上

に、大鏡あり。鎌倉之権五郎一人にて懸落いた

すなり。

一、建長寺

頼朝公五拾四才の時の御みゑ(御影)あり。此寺前に百檀(白檀)といふ木あり。

一、足利高氏公の寺あり。

一、北条家の御玉屋有り。

一、花殿様直筆額左甚五郎守本尊。右上杉様御屋敷跡あり。

一、東桂寺(東慶寺) 一、八幡宮

一、神楽堂 一、若宮

一、薬師堂 一、女石

一、しうらう 一、大堂

一、仁王門、石の鳥居三つ

一、長谷勸音(観音)前に、坂東四番の札所、御

文式丈八尺なり。鎌倉権五郎宮あり。此処古跡

には候え共、随分結構成名所也。

正月五日

丸や忠助泊り。中宿。旅籠八百五拾文。

賄 皿「大ゑび」

平「角ふ、かい、大こん、いも、しひた

け、せり」

皿「大こん」

汁

飯

朝

皿「焼どふふ、いも」

平「とふふ」

皿「大こん」

汁

飯

此処より少行、大仏堂御立。入口に二王門御

立。本尊御丈三丈三尺、はば式丈。其より式拾

文出し、中を参詣仕候。

一、江之嶋

二里

右は加登屋政右衛門処に荷物詔置、御山参詣い

たし、

一、本尊日本四弁才天に参詣。奥の院壺丁有。大

日如来御立。たいなひくゞりあり。諸仏多し。

たい松にて拜む。随分結構也。

宿前には、

日蓮上人の堂有。入口には門有。末社数多し。

誠に結構也。

片旅籠、五百五拾文。

御賄 皿「大ゑび壺疋」

ちよく「切こんぶ」

皿「な」

汁「とふふ、ゆわし」

飯、沢山

此処は誠に砂道にて、歩行には大難法仕申候。

此間に川有。舟ちん五拾文いだし。

一、藤沢

二里

此処に藤沢山と言大堂有。御宝物開帳。鬼鹿毛

へ懸しくつわ、天匂（天狗）のつめ、照手の姫

の持たる八角の鏡、小栗殿の墓所、照手姫の墓

所、上に五りん有。結構也。

一、平塚 三里拾八丁

此所入口に馬入川、大川有。舟賃五拾文出し。

此間に桜川と申所に花水橋有。

一、大磯 壱里

町は能き所なり。

正月六日

山城屋勝右衛門泊り。中宿。旅籠式朱也。

賄 皿「黒だひ」

平「せり、はんぺん、花ふ、しひたけ、

いも」

皿「大こん」

汁

飯

朝 皿「糸こん」

平「とふふ」

皿

汁

飯

一、海沢（梅沢） 二里

一、小田原 二里

右は拾壱万石、大久保相模守様の御城下也。町

はながし。

一、湯本 壱里半

正月七日

福住久蔵泊り。旅籠式朱と式百文。大上々宿。

此宿上々にて、家も、畳も、賄もよし。出湯き

れいにて、式間四方の内湯有。此処へ九つ時着

致し、緩々入湯仕、誠に宜所也。参詣の人々沙

汰いたし、必々泊るべし。

賄 皿「大こん、ねぎ相物」

平「かんびう、焼玉子、こんぶ、牛房、

とふふ」

ちよく「のり」



皿 [大こん]

汁

飯

朝 皿 [干あゆ三疋]

平 [とふあん懸]

皿 [大こん]

汁

飯

一、はた(畑)

一、箱根

壱里

壱里八丁

右は峯に箱根権現御立。左に駒形堂、右に薬師堂有。頼朝公御代釜鍋有り。宝物曾我五郎太刀有り。さい川、水海、宮舟、鏝の石沼。長さ三里、中二里の大沼有り。誠に以大難洪峠、日の中通るべし。

従是伊豆国

一、三嶋

三里拾八丁

右町中に、日本摠鎮守三嶋大明神大社御立。石

鳥居に大門有。ほりもの見事。左右に池有。こ

ひ多し。又左に御神馬御立。御本社大き結構。

どふばと多く居る。参詣すべし。

一、沼津

壱里半

正月八日

新居屋太郎右衛門泊り。但し中宿。壱貫文。

中食取り。

右三万石水野出羽守城下也。入口に三拾八間板

橋有。此処山王権現御立。

賄 皿 [なます]

平 [もくそく煮]

皿 [大こん]

汁

飯

朝 皿 [数の子]

平 [とふふ]

皿「大こん」

汁

飯

一、原

一里半

間に式拾五軒（間）板橋有り。

一、吉原

三里六丁

此処は能々富士山の根禁、右に見て通り、高き

事誠に目を驚し、又八分匆頭より上には雪有。

其より少し行、柏原と云所に白酒の名物有。富

士川舟賃百五拾文に河あり。越して向岩渕云

所、栗子餅名物あり。

一、岩淵

沓里

一、かん原（蒲原）

二里

一、由井

沓里

一、沖津（興津）

二里拾二丁

此処清見町と言。二丁登り寺有。御庭に拾七間

のはい梅有り。

一、江尻

沓里

正月九日

京屋源平泊り。上宿。旅籠九百文。中食取り。

賄 皿「くろだひ」

平「きす、とふふ」

皿「大こん」

汁

飯

朝 皿「きす」

平「そく煮」

皿「大こん」

ちよく「青なくるみ合」

飯

一、三尾松原（三保松原）

沓里

此処八丁登、三尾大明神御立。大社也。竜花寺

庭に、四間四方のしゃぼてん有。又そてづ大き

事、口三尺斗り、丈三丈斗り有。見物すべし。

一、九（久）能山

壱里

右は門下に石垣彦太夫と申宿へ着いたし、荷物  
詔置、案内頼み、門口より登る。石壇にてつみ  
上げ、高き事広太、大門をくゞり少し行、右に  
井戸有。深き事目を驚し、其より東照大権現御  
本社、右大臣、左大臣の門を通り、五重堂有。  
本社金銀極さひしき、日光にもおとらぬ所な  
り。台門切石にてつみ上げ、上より海を詠め、  
誠に景地也。必々参詣いたすべき所也。

一、府中

三里

正月十日

中ふじや又右衛門泊り。下宿。旅籠壱貫文。

此処細工名物也。御城下は誠に結構。御城の構  
ひは、堀脇五六丈も切石積上げ、御門の様子と  
いへ、随分び、しき仕懸也。御城を右に見て通  
り、千間堂（浅間堂）へ参り、石の鳥居、仁王  
門、右大神、左大神門有。神楽堂其外末社多

し。本社千間堂（浅間堂）、大階かねあり。登

り参詣仕候処、日光まがひと見物す。其より宿  
へ帰り、町も随分きれひにして、又古吉原辻、  
江戸の吉原にもまさるなり。其より安部川橋銭  
四拾文也。

一、まりこ（丸子）

壱里半

此処とろ、の名物有り。此間宇津宮（宇津谷）  
村あり。とふだんご（十団子）の名物有。其よ  
り峠へ登。難渋道なり。

一、岡部

二里九丁

此間三拾間板橋あり。

一、富士枝（藤枝）

壱里半

此所松平能登守御城下なり。瀬戸川はしせん忒  
拾文出す。

一、嶋田

三里

半道行、大井川船渡に相成。切手取り壱人分、  
百忒拾文宛いだし。誠に広太成大川なり。

従是遠江国

一、金屋（金谷）

沓里

正月十一日

扇屋惣十郎泊り。旅籠九百文。下々宿。但し宿は小ざわやへ泊るべし。

此処町相応也。其より直に峠、さよの中山迎、随分永き峠なり。此間にあめてもち（飴の餅）名物、沓つ代拾五文。子そだての勸音（観音）御立。夜なきの石有。此石に弘法大師南無阿みだ仏書付置たり。

一、日坂

二里

此処わらび餅名物なり。一膳代百文なり。

一、掛川

二里

右は、五万五千石大田（太田）備中守城下也。

町外より唐金の灯籠有。秋葉、鳳来寺道、是より沓里と申は五拾丁道也。田畑よろしき土地と見請通り、間々は山路也。

一、森村

三里

正月十二日

大黒屋源五郎泊り。旅籠沓貫百文。中食取り。大極々上宿。

右町入口に川有。橋賃拾五文也。山中には誠に結構町也。其より四拾八瀬川迎難渉也。水増しに相成候えば、通用不相叶。

賄 皿「くろだい」

平「糸こん、青な、しひたけ、きす、に

んじん」

皿「大こん、青な」

汁「とふふ、かつ」

茶飯

朝 平「とふふ、のり、しひたけ」

ちやく「牛房」

皿「大こん付、生が」

汁「とふふ、かつ」

飯

右は、此宿へ必々泊るべし。

一、みくら（三倉） 式里半

一、市之勢（一の瀬） 半道

右是迄の間は、四拾八瀬川、誠に河越斗り、大に難法也。其より大峠越也。

一、いぬへ（犬居） 二里

此間板川舟渡し、賃せん四拾文出し。

一、麓 半道

一、坂下

此処より秋葉山へ五拾丁登る。唐金の鳥居、本社迄に三ヶ所あり。入口右の方に大金仏御立。

一切経堂、仁王門有り。夜灯不数知御立。坂根

に御水屋あり。大き成大可有。其より石だん登

り、唐金鳥居根に唐獅子、右に金堂、秋葉大権

現御本社なり。其より宿坊中見物仕候処、大き

成重のう（十能）長さ壺丈三尺斗り巾三尺斗り

二つ、火ばし壺ぜんも壺丈斗り、右尾張国よ

り上りたるなり。此時は別当不相極処にて、御

札は不請。誠此御山は大きにして広大成は杉山

にて少も見はらし無之候。此より戸くらへ懸通

し下り五拾丁也。

一、戸倉 五拾丁

正月十三日

柳や銀助泊り。旅籠壺貫文。下々宿也。

賄 皿「大こん、にんじん」

平 「とふふ、のり」

皿 「大こん」

汁

飯

朝 皿 「にんじん、青な」

平 「大こん、牛房、油上げ」

皿 「大こん」

汁

飯

此間に天滝（竜）川と言舟渡し有。一人分百文宛。但し参詣に御出の人は、此河をこして泊るべし。明け前は舟出す（デズ・イデズ又はダサズ・イダサズと読むか。）

一、さ伊川

二拾丁

此処峠有。難渋也。誠に杉林にて、みはらし少も是なき所也。

一、石打

七拾二丁

此間熊村迄大峠なり。大に難渋至極なり。

一、熊村

五拾丁

一、神沢

式拾五丁

此間山坂なり。

一、大平

七拾五丁

此所にて中食仕候。此間大峠難渋至極誠に筆に難尽程なり。

従是三河国

一、酢山（巢山）

五拾丁

一、大野

七拾五丁

又此間大峠あり。此処随分町結構也。

一、鳳来寺

壹里

此日大雪降り。是迄の内拾八丁は川端通り、其より拾八丁間大登り。大石山三丁程行て鳳来寺寺号なり。式拾壹ヶ寺有。日本無双の薬師如来御立。御本社大がらんなり。東照大権現御立。金仏御立。石鳥居、仁王門あり。壺丁くく棒石有。御山は誠に高山にて、岩山なり。希だひ結構也。必参詣すべし。此処にて家内安全の御札二百にして請、其より色々御守あり。

一、門屋（門谷）

九丁

不天氣

正月十四日 渡部屋半藏泊り。上宿。

賄 皿「す、大こん、青な」

平「とふふ、ねぎ」

皿 [大こん]

汁

飯

朝

皿 [青な]

平 [大こん、牛房、油上げ]

皿 [大こん]

汁

飯

此間壱里程行、瀬川渡し。ちんせん壱人分三拾文出し。

一、錢神

五拾丁道壱里半

一、新城

同断二里

右は七千石御旗本城下也。町は長し。

一、大木

二里半

一、五湯 (御油)

二里半

従是東海道に出合申候。

一、赤坂

拾六丁

此間御朱印地有て、二拾四丁付落道有。

一、藤川

二里九丁

正月十五日

小藤屋栄助。下々宿。旅籠八百文。此宿は泊るべからず。

賄 皿 [数の子]

平 [とふふ、ねぎ]

皿

朝 皿 [にんじん、むきみ]

平 [大こん、いも]

皿 [大こん]

中食取り。

一、岡崎

壱里半

右五万石本田 (本多) 殿城下也。随分宜敷町也。町外れ長さ二百八間の大橋あり。

一、ちりう (池鯉鮒)

三里半

此所にて中食すべし。

従是尾張国

此間に有松と言所に、木綿しほり名物有。誠に御好次第。必此所にて買べし。

一、なるみ（鳴海） 二里半

此処町結構也。是より壹里半程行、勸音（觀音）御立。誠に大社にして末社多し。參詣すべし。

一、宮 壹里半

正月十六日

綿屋久兵衛泊り。下宿。旅籠壹貫貳百文。

此処あつた大明神御立。大社にして末社多し。門三つ有。屋根はひわだぶきなり。是よりなごや迄は町つゞきなり。

賄 皿「かまくらゑび」

平「はんぺん、丸ふ、せり」

皿「にんじん、れんこん」

朝 皿「はんぺん」

平「大こん、いも、油上げ」

皿「大こん」

一、名古屋 壹里半

入口に宝願寺ごぼふ（本願寺御坊）様御立被成結構也。右は六拾壹万石、尾張中納言様御城下也。町はながし。此より町はづれ、板橋二つ渡り、追分有り。津嶋道十五丁斗り行。札所十二面觀世音御立。參詣すべし。

一、甚目寺 壹里

此御本尊勸世音大社御立。三重塔有り。二王門有り。則門より右へ行。

一、津嶋 三里半

右牛頭天王御立。赤き鳥居、左に御神馬、御清め。御本社大がらんにて、結構也。御守代三百文にて申請。にわ鳥、どふばと多く居る。

一、さや（佐屋） 拾八丁

此処船頭岡本屋八藏処へ着致し、舟賃壹人分百



三拾文の処、難風悪く見へる故、二そふ分へ三百式拾文出し候。此所より五拾丁下り、まひかし(前ヶ須か)と云ふ処より乗、桑名迄着。但し、拾式人にて三百文、酒代呉申候。七つ過より暮五つ頃着致し申候。

従是伊勢国

一、桑名

二里八丁

右御城下入口へ舟より上、大神宮様石鳥居有り。元拾壹万石松平越中守殿城下也。大橋二つ有。町はながし。

正月十七日

宮本や定吉泊り。壹貫百文。下宿。

賄 皿「白魚」

平「白魚、丸ふ、青な」

皿「大こん」

朝 皿「はまり(はまぐり)、生が」

平「いも、油上げ、干大こん」

皿

一、四日市

三里八丁

一、追分

壱里半

此処に大神宮様鳥居有。

向見 右 京都

左 伊勢

一、かんへい(かんべし神戸) 壱里廿六丁

此処に道具屋善六と云宿有り。

一、白子

壱里半

此処に菊一文字金物あり。乍尔高直也。金物は悪し。此より少行、白子勸音(観音)御立被成、仁王門、ふだん桜(不断桜)と云御神木有り。是は一年中咲てるなり。

一、上野

壱里

一、津

二里八丁

右三拾五万石藤堂和泉守様城下也。是は長き町也。間に板橋二つあり。此処は米壱両に式斗な

り。酒は壹升八百文なり。

正月十八日

若さや六右衛門泊り。上宿。(宿代は書いてな

い)

賭 皿「このしろ」

平「ゆば、かれひ、ねぎ」

皿「大こん」

朝 皿「にんじん、かひやき」

ちやく「青な合物」

皿「大こん」

一、雲津

二里

此処町中に川有。橋賃五拾文出す。

一、月本

半里

此処、追分 なら越

いがごひ (伊賀越)

但し、此処へ大坂宿大和屋弥三郎と申宿引参り

居、御神酒として酒三盃程、肴拾式人へ出し、

御馳走に相成、荷物等も相送り申候。

一、松坂

壹里

此処町能処也。出口に川有り。はしちん六拾文

出す。

一、櫛田

壹里半

此処たばこ入名物。店数式拾軒もあり。よき店

見合買入可申候。真本家と申は今此印有処は宜

敷也。

此間川有。橋賃三拾文出す。

一、明星

壹里

此処湯てん名物有り。

一、小畑 (小俣)

壹里

此所に宮川迎舟渡し有。是は伊勢太夫様御馳走

舟に出し置候処、御一新に相成、壹人分四拾文

出す。

一、山田

半里

正月十九日、七時半時、三日市太夫次郎様に着申

候。落物壺人に付御供金共に、壺両と式朱宛出し申候。其より翌日太夫様より案内出、本宮、外宮参詣いたし、其より四拾末社参詣仕。天の岩戸は御一新に付、参詣不被相成、太夫様御馳走馬有之候処、是もなし。又あいのおおすぎ、お玉も不出。是より内宮八拾末社奉拜。其より七拾二丁登り、朝熊だけ、福一万、虚空蔵参詣す。此処にて御無さう万金丹壺粒代八拾文宛出し相求。三拾丁程下り、とふふやと言茶屋にて太夫さまの御馳走にて、中食仕候。茶代迎壺人に付百文づゝ出し。其より二拾丁程下り、登りの節荷物詭置候茶屋へ立寄り、茶菓子喰ひ、是より近道にて、古市の町中へ出る。案内人へ拾二人にて酒代として壺朱呉、太夫へ七つ過に相着申候。誠に此日は朝より四つ頃迄、大雪降りにて難洪仕申候。

太夫様御賄献立

正月拾九日晚

皿「うど、大こん、にんじん、くじらなます」

汁「ねぎ、かつ」

壺「いも、にんじん、とふふ」

飯

二の膳

皿「かつ魚、うど、さしみ」

ちやく「生が、溜り」

吸物「はんべん、丸ふ、のり」

ちやく「青なからし合」

大皿「くろだひ塩焼」

肴 壺「くろだひ」

二「たこ、はんべん、さとうかんで

ん」

三「みかん、くぢら、うど」

外に、御酒沢山有。

同廿日 此日四つ頃迄雪ふり

翌朝

皿「大こん、うど、まぐろなます」

汁「青な」

平「のり、ぼら」

飯

大皿「このしろ焼物」

朝ま山中食

皿「このしろ、大こん」

平「はんぺん、丸ふ、のり」

小皿「大こん付」

飯

晩

皿「せり、大こん、にんじん、はんぺん

なます」

汁「青な、かつふ」

壺「寒こん、牛房、れんこん」

飯

二の膳

皿「まぐろ、うど、青のり」

ちやく「溜り、みそ」

ちやく「生こんからし合」

平「はんぺん、切ふ、せり」

大皿「このしろ塩焼壺疋」

酒沢山

同廿一日 翌朝

皿「にんじん、おろし、せり、かつ魚な

ます」

汁「青な、かつ」

壺「焼どふふ」

飯

二の膳

皿「大こん、にんじん、うど」

平「ぼら、白こんぶ」

ちやく「大こんづけ」

大皿「鎌倉ゑび老疋」

御酒沢山

外に土産

御守に

唐風呂敷壹枚

此処五つ時頃出立。

其より元へもどる。山田より、

一、松坂

五里

正月廿一日

米屋甚右衛門泊り。上々宿。旅籠九百文。

皿「くろだひ」

平「とふふ」

皿「大こん赤づけ」

朝 皿「たひ」

平「油上げ、切こんぶ」

皿「大こんづけ」

一、六軒

壹里

此処追分、伊賀越へ越申候。

一、小川

壹里

此処中川と云河有。式拾文出す。

一、はた（八太）

壹里

一、田尻

半里

一、大の木（大仰）

半里

此処に河有。はしせん三拾文出す。

一、二本木

五拾丁

此所角屋半右衛門。片はたご四百文。

一、中の村

壹里

一、かいと（垣内）

壹里

一、青山

二里

伊賀、伊勢堺

此処大峠なり。雪道にて大に難渋仕候。

峯より少し下り、弘法大師一夜の作地藏尊御

立。足のいたむ人は、此宿にて御無さうさづく

る。

一、いせ路（伊勢地） 五拾丁

正月廿二日

楓屋武右衛門泊り。大上々宿。壺朱と百文。

皿「あを」

平「寒どふふ、しひたけ、こんぶ」

皿「大こん」

朝 皿「かつ」

平「いも、生こん、牛房」

皿「大こん」

一、あを（阿保） 壺里

此処に虫くひのつりがね有り。

一、新田 壺里半

一、なばり（名張） 壺里半

此処藤堂宮内様壺万石城下也。

一、かたか（鹿高） 壺里

一、三本松 壺里八丁

此処にて中食宜敷なり。

爰は伊賀、大和堺也

此宿に鎌倉時頼公身植の松有。其を名付て三本

松と云。

従は大和国

此所に山辺の赤人古跡有。

一、山部 壺里半

此所迄山坂にて、道は大に難渋仕候。

一、はせ（長谷） 壺里半

正月廿三日

吉野屋平左衛門泊り。大極上宿。旅籠壺貫式百

文。

此処西国八番札所勧音御立。前の坂百八拾間あ

り。御本社拾三間四面。勧音様御丈式丈六尺。

弘法大師直筆の閣（額）二つ有。三重塔あり。

八つ房の梅の木あり。ぶだひ（舞台）高くはせ

中見落し、誠に結構也。

賄 皿「かつ魚」

一、あり原（在原）

一里

平「青な、たけのこ、いも、焼はんぺ

此処に在原業平の古跡有り。

ん、しひたけ」

一、おびとけ（帯解）

一里

皿「大こん」

此所柿本人丸古跡あり。

朝 皿「しら魚」

一、奈良

沓里

平「魚ふ、牛房、生こん」

正月廿四日

皿「大こん」

印判や庄右衛門。旅籠沓朱四百文。下々宿

外に菓子土産出申候。

より案内頼み、拾貳人にて沓朱出し。

此処、米は沓両に三斗三升、酒は沓升六百五拾

一、猿沢の池。是は水すまず、みこらす（「にご

文。

らず」か）、出ず、へらず池なり。

一、追分

沓里

一、衣懸松

一、五重の塔

此処三条小鍛冶宗近の金物并つの細工色々あ

一、勸音堂

一、大仏表門

り。

一、高（興）福寺

一、南円堂

一、三輪（三輪）

沓里

一、八幡宮

一、若宮明神

此処三輪大明神御立。門前に茶屋有。□そうめ

一、三月堂

一、二月堂

ん名物。

一、大仏殿

一、春日大明神

一、たんば市（丹波市）

二里

此所灯笼数、鹿不知数。

一、弘法大師御花松有。其より大つりがね、夫より三条小鍛冶宗近本元也。春日様、御無さうの墨、三笠山名所数多し。此時御一新にて、鹿寄場と云は、相定居申候。

一、西の京

五丁

此処六重塔有。つりがね二つ。生花作り色々。誠に結構也。

一、郡山

半里

賄 皿「しひら」

右拾二万石松平美濃守御城下なり。町外正一位

平「牛房、いも、にんじん、青な」

源九郎稻荷大明神御立。右は天下の御普請なり。

皿「大こん」

朝 ちやく「ひたし」

一、小泉

壹里

平「油上げ、青な」

右は壹万三千石城下なり。勸音様御立。門前

皿「大こん」

にて、此処にて中食仕候。

此処、米壹両に三斗三升、酒一升代五百五拾

一、法竜寺（法隆寺）

壹里

文。

此処、正徳大師（聖徳太子）御立。千石の御朱

一、法花寺

廿丁

印あり。七堂がらんに五重塔、嶺の薬師八角作

寺結構也。此処に御内裏様御屋敷有。

一、西大寺

廿丁

りなり。御宝物の納物は刀、脇差、鑓、具足、

一、菅原天神

拾丁

鏡、くし、こうがい、奉納色々数多、結構なり。

一、正大寺

拾八丁

一、竜田

五丁



此処竜田大明神御立。

一、だるま寺（達磨寺） 五拾丁

此処にだるま大師の枝をさしたるは、則作被相成、さかさ竹と申。

一、染井寺 二里拾丁

此処中将姫のまんだら糸染の井戸有。糸掛ざくら有。

一、たいま寺（当麻寺） 六丁

正月廿五日（旧暦）

玉屋徳兵衛。上宿。旅籠壱貫文。

二月廿三日（新暦）

宿より案内頼み、拾式人にて式百文出し。此処

中将姫のまんだらおりにしき有。御宝物、或は

中将姫廿九才の時、西方みだの浄土より、廿五

ぼさつ御迎にて、御僧の御影、御堂御立被成

候。次九尺の所にて、壱丈六尺のまんだら織給

ふ処を、ふしぎの間と、座敷勧音さまおり仕廻

の処なり。

其より女人高野堂、弘法大師御立。前には弘法様すがた見の井戸有。

其より中将姫御足跡有り。

其より脇に井有。其水にてねり給ふ薬、だらにすけと云薬、爰にて調合いたす。十六才時まんだらおられ候間、十七才にて髪をとり、其後常

念仏被致。其より五重塔二つ有。本尊は大日如来なり。

来なり。

坊中数多し。随分結構也。

賄 皿「かつ魚」

平「寒どふふ、切こんぶ、いも」

皿「大こん」

汁、結構也

朝 皿「かづのこ」

平「とふふ」

皿「大こん」

一、高田

壱里半

一、吉野

壱里

一、しよこふ村（小綱村）

三拾丁

正月廿六日

一、今井村

八丁

ふくぢや紋之丞。上宿。はたご壱貫文。

此処に神武天皇御立。參詣仕候。誠にみさゝぎ  
地内大き也。廻りは尺大門さきふり有。三月十三日に開  
く。但壱年に壹度也。

米は壱両に貳斗。  
酒壱升壱貫文。

一、あすか（飛鳥）

壱里

右は御宿より案内頼み、壱人分三拾文出し、其  
より仁王門、大にして結構也。御本社藏王大権

一、立花寺（橋寺）

八丁

現御立。其より少行、義経公駒つなぎ松、弁慶

一、岡寺

六丁

の刀針石に打候也。義経公御乗被成候駒の足跡

一、とふの嶺（多武峯）

五拾丁

は、よろひ、太刀、弁慶同断開帳。錢二拾文宛

此処鎌足公の御廟所御堂御立。末社多し。  
拾三重の塔有。坊中多し。誠に結構也。

出し。拾三品開帳いたし、又だらに助と云葉  
有。誠に此所桜木何本と云不知数。吉野の山ざ

一、四軒茶屋

八丁

くらとは此事也。大に結構也。

此処にて中食仕申候。

壱里

一、む田（六田）  
三拾丁下り

一、たき畑（滝畑）

壱里

出口に舟渡有。三拾文出す。

一、上市

壱里半

一、土田

一里

此処川有。橋賃三拾文出す。

一、宇野

一里

此処にて中食仕申候。

一、五條

一里

此処町宜敷所也。

従是紀伊国 此より五拾丁道也

一、橋本

二里

此処舟渡し有。八拾文出す。

一、かむろ (学文路)

壹里

一、かね (河根)

壹里

正月廿七日 (旧曆)

中屋団次郎泊り。上宿。旅籠九百五拾文。

二月廿四日 (新曆)

賄 皿 [なます]

平 [牛房、にんじん、しひたけ]

皿 [大こん]

朝 皿 [青な、大こん]

平 [いも、にんじん、大こん]

皿 [梅付]

一、神谷

壹里

此処に宿坊の茶屋あり。御馳走、酒出る。此茶屋より宿坊までは案内付。其より五拾丁登り也。不動坂迎四拾八回也。

一、女人堂

是より女人參る事不相叶。

一、高野山

五拾丁

右は正月廿八日、宿坊北室院へ、四つ時相着申候。落し物式朱宛出し、百五拾にて、先祖代々

御仏申受、案内付參詣す。日本御大名方石塔あり。明ヶ地光秀とて、信長公界し(害し)、其

ばちにて石塔の台われ、ほん字横に也(成)申候。米沢様の御玉屋左に、極さいしきにて二つ

有。高野山壺番の石塔、駿河大納言様是なり。

一、禁中様御墓地行一段高く御立被成候。

一、かくばん大師ほら切地藏じや柳有。

わすれても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川

の水

一、木食上人参り、こうみやう真言御十念受べし。

より五拾二丁下り、道中に弘法さまけさかけ石有。拝すべし。

一、御供所 一、不動堂

一、矢立 二里  
一、花坂

一、大黒堂 一、ごま堂

一、しが(志賀) 壹里

みめうの橋、悪人は渡り兼候と云。

一、大津峠(麻生津峠) 壹里半

一、万灯参り。灯明せん八拾文宛いだし、ひんの

此峠道は悪し。難渋仕候。

一灯あり。其奥の院香をたき、御本社弘法大師

一、大津

参詣いたし、難有事、日本にれい山多しと云へ

此処ニ吉野河舟渡し有。百文出し。

ども、三国一御山とは此事也。姿見の井戸、あ

一、高野辻 半里

びらうんけん堂、七堂がらん大塔は日本一也。

一、粉川寺 半里

大日如来高野山は、御山と申ながら、大地にて

正月廿八日

御朱印知行二万千石、坊中千ヶ寺有と云。式方

金や茂兵衛泊り。上々宿。旅籠壹貫貳百文。中

石と申なら、御大名衆御寄進也。売物ちうず其

食取り。

外色々数多し。此処金物都て安し。両替はいた

賄 皿「まぐろ」

しても吉。誠に結構也。御山なり。其より大門

平「色はんべん、白こんぶ、牛房」

を通り抜け、和歌山の城下へ相下り申候。右門

皿「大こん」

朝

ぢやく「なます」

ぢやく「大こん」

平「寒どふふ、白こんぶ、にんじん」

皿「大こん」

家内安全御札出申候。

此処（粉川寺）に西国三番札所勸音様御立。入

口に仁王門有。其より坊中多し。又門有。本社

拾八間四面四方、八つ棟作り也。前は両方つば

山有。末社多し。誠に結構筆に難尽候也。

高野山御賭献立

一、岩で（岩出）

二里半

皿「ひぢき、白あい、大こん」

此間に舟渡し有。壺人分八拾文出す。

平「とふふ、のり」

一、八軒や

二里半

皿「大こん」

一、紀三井寺

二里

汁「とふふ」

平岡や善七中食。

飯

二の膳

皿「ゆば、寒どふふ、しひたけ、にんじ

此処西国二ばんの札所。勸音様御立。仁王門、

ん、いも」

石だん式百八拾けた、左に楠木御神木、御本社

吸物「ゆば、のり」

七間四面、誠に結構。末社多し。和歌の浦より

ぢやく「牛房、大角豆」

城下迄、四方目の下に見落し、宜敷処なり。其

御酒沢山。茶菓子有。

一、和歌の浦

拾八丁

此処より名所亀岩、東照宮みだひさまの御玉屋、其より左に廻る。岩間松見事、いも勢山

(妹背山)、三つ橋、塩谷明神、玉津嶋明神、其より東照大権現、大門きれいにしして、右大臣左大臣門有。御本社日光まがい。末社多し。誠に

日本三ヶ所の名所也。筆紙も難尽候間、参詣の人々必々廻るべき所なり。其より和歌山の城下へ相懸る。

一、若山城下

五拾丁

右は紀州大納言様五拾五万石の御城下。町はごばん割にして、きれいな。城の構ひ、切石積上宜敷城也。町外れ大河有。舟賃百文宛出し申候。

一、西の庄

壱里

一、糸切

壱里

一、かだ(加太)

壱里

正月廿九日

大坂屋平兵衛泊り。上宿。中食取り。旅籠壱貫 貳百五拾文。

此日一日大雨降り、大ニ難渡仕申候。

賄 皿「いかなご」

ちやく「大こん干、す」

小皿「大こん」

朝 皿「大こん」

平「にんじん、干子、寒どふふ」

ちやく「生があまづけ」

此処に淡嶋大明神御立。大社にて結構也。其より式百文にて御守申請、翌日此処よりむや(撫養)まで拾三里海上也。壱人分三朱宛出し、五つ時より乗出し、暮六つ時坂田屋惣兵衛処へ相着申候。又船頭へ酒代百文宛呉申候。

二月朔日

坂田や惣兵衛泊り。上宿。

此所へ六つ時相着申候。此より地つゞきにて長

し。

賄 皿「ばかがい、ねぎ合物」

平「まぐろ、寒どふふ、かつ」

皿「大こん」

朝 皿「まぐろ」

平「生こん、八盃」

皿「青な」

一、壹貫貳百五拾文。中食仕候。

米壹両に貳斗八升。

酒は一升壹貫貳百文。

一、坂東村

三里

此処に坂東第一の札所、本尊釈迦仏如来。右に

弘法大師御立。左二重塔有。

一、大寺村

壹里

此処坂東三ばんの札所、本尊は地藏菩薩御立、

左に大師御立。

一、矢竹村（矢武村）

壹里

此処坂東五ばんの札所、本尊みろくぼさつ、五

百らかん御立。左にさゞい堂有。本尊、弘法大

師御立。誠に日本一の札所、結構に御座候。

門前先大黒屋政藏中食。

此処よりこんぴら道、十里拾ヶ所の道なり。清

水村へ行べし。右宿にてしかと道筋を尋、氣を

付て行べき所也。

一、ひきの村（引野村）

壹里

此処は坂東六ばん、本尊は勧音様御立。左に弘

法大師。門前は左右はそてつ、かしの類美し敷

候。

一、高尾村

拾八丁

此処は坂東七ばんの札所、本尊勧音様御立、左

に弘法大師御立。

一、土成村

拾貳丁

此処は坂東八番札所。大門通り左に寺、拾六ら

かん、二重塔、其より本社、勧音様御立。上に

は弘法大師御立。随分宜敷所也。

一、田中村

拾八丁

此所は坂東九ばんの札所、本尊勸音様御立。

一、切幡村

二拾五丁

此所は坂東拾ばんの札所なり。本尊勸音様、弘

法大師御立。但し、参詣は不仕申候。

二月二日

門屋玉ヶ関泊り。下宿。旅籠壹貫文。中食取り。

賄 皿「大こん、す」

平「玉子、大こん、とふふ」

汁「とふふ」

飯

朝 皿「大こん」

平「とふふ、干子」

汁「とふふ」

飯

一、なら坂（奈良坂）

三拾丁

一、ひかい谷（日開谷）

三里

此処谷合にして、沢登り長し。たつら（田面）

迄六里の処山坂也。道は悪し。（大坂峠、日下

峠を越えたか）

一、たつら（田面）

三里

此処より本海道にて、宜敷道なり。

一、長尾

二里

一、仏生山

三里

二月三日

あはや孝七泊り。中宿。旅籠壹貫文。中食取り。

此処に拾二万石松平讃き守様の御玉屋有。仁王

門御立、都合本社迄に門四つ有。左右は石塔多

し。上は御門立ち、廻り入事不相成。

此処両替は壹両七貫五百文なり。但し、銀にし

て七拾五匁なり。



米は壹両二式斗式升。酒は壹升四百九拾文。

賄 皿「なます」

平「まぐろ、こんぶ、牛房」

皿「大こん」

朝 皿「まぐろ、にんじん」

平「とふふ」

皿「大こん」

一、十三塚 一里半

一、滝の宮 二里

此処に菅家公古跡有。天満宮御立。参詣仕候。

一、こんぴら入口 三里

此処に石大鳥居有。其より御本社迄二拾五丁。

一、金毘羅 二拾五丁

二月四日四つ半時

筆の海茂吉

此処へ荷物詔置、中食仕候。

右町中に唐金の太鳥居有。御本社迄拾八丁登り

大門有。其より守札、御神酒、すゞ共に買もと

め、別当にて金二百疋出し、家内安全、道中安

全、一切の御守申請、御本社へ参詣す。末社数

多し。誠に皇国第一の御山と申難有事筆紙に難

尽御座候。

一、善通寺 六拾丁

此処日本一切経堂がらん有。御本社弘法大師御

誕生寺あり。末社多し。

一、弥谷寺 七拾丁

此処拾八丁登り、いや谷寺有り。其より少し登

り、弘法大師御立。屏風岩に不動様御立。御本

社、札所、勧音有。随分結構也。

一、屏風ヶ浦 四拾丁

此処善通寺奥の院。弘法大師御立申候。

一、たど津(多度津) 半里

右壺万石城下なり。

一、丸亀 壺里

二月四日

右は京極たくみの守拾五万石の城下也。

かしわや団次泊り。

片はたご壺朱。

賄 皿「たこ、青な」

平「はんぺん、切ふ、青な」

皿「大こん」

其より夕五つ頃舟に乗り、賃錢壺人分壺歩式朱宛つ出し、ふとん代壺朱と四百文、翌日不天気にて舟休み、芝居見仕候。

翌六日□加山（瑜伽山）より室津迄の約束にて、八つ頃乗出し、暮に相成、ゆふか山へ不廻、翌七日九つ時、たいくつにて、赤穂城下へ

相着申候。二万三千石御城下。中食仕、其より

四拾七騎のはか所見物仕申候。

此処米壺両に式斗八升、酒は壺升八百文。

一、なば（那波）

二里

一、片嶋

壺里

一、正条

拾八丁

三月五日（新曆）

二月七日（旧曆）

丸や次左衛門。中宿。はたご壺朱と三百十五

文。中食取り。

賄 皿「干子、ふ」

平「大こん干、牛房、とふふ」

皿「大こん」

朝 皿「大こん」

平「とふふ、生が」

皿「大こん」

一、いかるが（斑鳩）

二里

一、姫路

壺里

右拾五万石酒井楽雅守（雅楽頭）御城也。町結

構也。かわ細工色々名物有。

一、お着（御着）

壺里

一、まめヶ崎

廿丁

一、清水

壱里

一、曾根

三拾丁

一、長池

壱里

曾根の松、菅照星（菅丞相）御本社誠に景式

但し、姫路より此間は舟ばし度々有。恐入申

（景色）宜敷所也。

候。

一、石宝殿

三拾丁

三月六日（新曆）

御本社大生石高倉大明神御立。本尊大石三間の

二月八日（旧曆）

五間。結構也。

明石や多右衛門泊り。壱貫百式拾文。中宿。

一、高砂

式拾丁

賄

皿「まぐろ」

此処牛頭天王、あい生の松有。其より町はづれ

平「寒どふふ、牛房、ゆば」

橋有。ちんせん三拾文出し。

小皿「大こん」

一、尾の上

八丁

飯

此処住吉大明神御立。尾の上松、あい生のま

朝 皿「ひらさき」

つ、竜宮より上りたる大つりがね有。鶴のすご

小皿「大こん」

もりの松、都のかた枝松、結構也。此処より拾

汁「とふふ」

丁程行、かこの松迎名木、天満宮御立。

飯

一、べつぶ（別府）

半り

此より五拾丁道

此処住吉大神宮御立。手枕松あり。

一、大久保

壱里

一、明石 同断 壹里半

右六万石松平左兵衛殿御城下なり。此所町はづれに、大倉谷と云所に、人丸大明神御立。八つぶさの梅、舟の形ち、大石内蔵之介直筆の閣(額)有。町海を見下し、宜敷古跡也。

一、一の谷 二里半

此所に敦盛のはか所、其所に茶屋有。あつもりそば名物。壹膳百文。其より案内取り、二拾文出し。源氏、平家の戦場、安徳天王の跡、てつかいの峯、ひよ鳥越、其より須磨寺、義経腰懸松、相生の松、敦盛守本尊勧音様御立、弁慶の桜名木有。

一、兵庫 壹里半

此処町は結構也。

一、こふべ(神戸) 半道

此所は異人高易場(交易場)相立、横はままがい、誠に宜敷也。是より大坂へ十里の海上、上

氣船(蒸氣船)、壹人分壹歩宛出し、八つ半時

乗出し、七つ半時(二、三字分余白)壹丁目上

氣船乗場へ上り、其より頭とん堀(道頓堀)ゑ

びす橋、大和屋弥三郎へ相着申候。

三月七日(新曆)

二月九日(旧曆)

大和屋弥三郎着。

旅籠式朱と式百文。上宿。

右翌日宿より案内頼み、十二人にて三朱出し、

見物仕候。

一、清水勧音左に三拾三勧音、じやりくわんおん

御立。門三つ有。弘法大師の閣(額)、五重の

塔、弘法大師御立。末社多し。

一、亀井水是は極楽より流出る。

一、生田大明神。是は秀吉公守り本尊也。御朱印

は三百石上る。仁徳天王、高倉大明神御立。末

社多し。其より妙法寺りつくわ松とて名木あ

り。

一、御城見物。堀深さ五丈、石垣高さ五丈、やげん堀なり。やぐらは、此は軍戦の時、放火にて焼失、今は無し。誠に日本一の御城とは此事也。驚目を候。

一、天満天神。末社多し。こふの池構へ、町南かわ壺丁壺人なり。

一、西本願寺。

一、東本願寺。宜敷寺也。其より此処呉服店大きにして、風呂敷、反物類、恐入申候。又四つ橋、させる名物、大店有。其より宿へ帰り、翌日頭とん堀（道頓堀）芝居、角にて大芝居見物。宿任せにて、壺人分二歩二朱宛出し。誠に目を驚し申候。其より翌日京都へ登り申候。

大坂より是五拾丁<sup>(是「書き落しか」)</sup>

一、守口

一、ひら方（枚方）

一、橋本

是處 二里

此処より拾八丁登る。男山八幡御立。石鳥居。其より大門あり。御本社誠に結構也。本社間におふ金のとよ懸り有候。はば三尺、厚さ二寸、長拾六間。京府中を見下し、宜敷所なり。

一、よど（淀）

壺り半

一、京六角堂

三里半

二月十二日

もぢや惣左衛門泊り。旅籠壺貫文。大極上々宿。

翌日宿より案内頼み拾二人にて三朱出し。

一、六角堂

一、拾八番札所

一、北野天神。大社なり。

一、白峯社四徳天王。是は明治二年新に建申候。

一、禁裏様、朝日御門。

一、知恩院日本一の浄土宗の湊なり。此所のつりがね日本一の金（鐘）なり。三代將軍家光公の

三里

御寄進也。此処にて座敷見分仕。百文出し。鶯

の谷渡り、千重つき（千畳敷）座敷見分。

一、ぎおん牛頭天王御立。五重の塔有り。

一、清水勸音。拾六番札所。三重塔有。此処にて

七拾文出し、おうむ鳥、金んけ鳥、いもり、く

じやく、ほうほう、色々見物するなり。

一、西王谷（西大谷）、三十三間堂つりがねあり。

此処に切石目がね橋と云名橋あり。

一、大仏殿。

一、西御門関（西御門跡）大きにて結構也。

一、東御門関（東御門跡）軍戦より仮屋。

一、稲場（因幡）葉師如来御立。

一、地藏堂、弘法大師、五重塔。

一、六孫王経基宮あり。其より島原けひせい見

物。四条通、三条通辺にて、色々買物仕、宿へ

帰り候。

二月十五日出立仕申候。

一、下加茂大明神御立。末社多し。

一、市原 二里

此所、小野、小町寺あり。姿地藏小町塚あり。

一、木舟（貴船） 壹里

一、増正谷（僧正谷） 拾八丁

此処源牛若丸兵法習し場所なり。

一、鞍馬 拾二丁

一、屋勢（八瀬） 二里半

此所茶屋三軒あり。是より山道也。五拾丁登

り、難渋也。

一、比叡山 五拾丁

一、惣輪塔（相輪塔）、高さ五丈余り。

一、釈迦堂 一、勸音堂

一、勢至堂

一、伝教大師御廟所。弁慶のつりがねあり。

一、金堂。大日如来。

一、中堂。葉師如来。

王城の鬼門を守る開山。き、しにまさる大がらん。坊中多し。御朱印八千八百石有と云。

一、坂本

五拾丁

此処に唐橋連大橋有り。一、草津

二里

山王権現廿二社。大社也。

一、唐崎

廿五丁

追分 右は東海道

左は仲仙道(中山道)

日本一松名木。水海に出る也。唐崎大明神御立。是より近江八景地なり。

一、大津

二月十五日

一、大津

五拾丁

一、森山(守山) 卍里

三井寺勸音御立。西国拾四ばん札所。少し行、奥の院、つりがね、木曾義仲の墓有。

一、ぜ、(膳所)の城 拾八丁

笹屋六郎兵衛。上々宿。旅籠壺貫文。賄 皿「わり干」

平「油上げ、青な」

右六万石城下。結構也。

一、せた(瀬田)

式拾壺丁

朝 ちやく「青な」

平「とふふ、生が」

右は、橋元の茶屋松屋清左衛門処へ、荷物詔置、石山寺へ参詣仕。勸音様、西国拾三ばんの

札所。誠に景山なり。元へ帰る。

一、勢田(瀬田)

中食取り。此間、篠原村、安河(野洲川)舟渡し。三拾文出し。

一、かゞみやま(鏡山)

二里

此処、あいの宿（間の宿）也。川渡し二拾文出し。

一、武佐 壹里半

一、ゑち河（愛知川） 二里半

此間に竹細工色々あり。

一、高宮 二里八丁

一、鳥居本 二里半

追分 右は中山木曾

左は北国

夫よりすりばり峠（摺鉢峠）有。茶屋式軒あり。

爰にて、伊井嘉門守（井伊掃部頭）三拾五

万石城下見ゆる。鳥居本之赤玉葉多くあり。

一、番場 壹里半

一、醒ヶ井 壹里

三月十四日（新暦）

二月十六日（旧暦）

銭屋仁左衛門。上宿。はたご壹朱と三百文。右

は宿にて尋べし。

此処六孫王経基腰懸石、あおりかけ石、□あみ

石、ぶたん桜有。日本一清水有。

賄 皿「ごっこ」

平「切ふ二つ、白こんぶ」

皿「大こん」

朝 皿「まめ」

平「油上げ、にんじん、大こん」

皿「大こん」

一、柏原 壹里半

従是美濃国

一、今須 壹里

一、関ヶ原 壹里

一、たるい（垂井） 壹里半

追分 右は中仙道

左は木曾道

（垂井町の太田三郎氏の御教示によれば、この



追分道標は宝永六年の建立で「右みのじお、が

きみち／左木曾海道たにくみみち」とある由。

此間に熊坂長半（長範）物見松あり。あふはか

（青墓）宿、照手姫汲給ふし清水あり。

一、赤坂

壱里拾二丁

此間壱里程行、追分あり。左木曾海道少し行、

大なる川、舟渡り五拾文出す。

一、みゑぢ（美江寺）

二里九丁

一、がう渡（河渡）

壱里六丁

此間河渡川舟渡し。八拾文出す。

一、加納

壱里半

二月十七日

かみや源助泊り。上宿。はたご壱朱と三百文。

中食取り。

此処三万五千石永井筑前守殿城下也。其より六

間かゞみ原（各務原）とて大原あり。

賄 皿「ふな」

平「角ふ、青な、しひたけ」

皿「大こん」

朝 皿「青な」

平「とふふ」

皿「大こん」

一、うぬま（鵜沼）

五里八丁

入口に、右の方、尾張家老成瀬隼人守（隼人

正）城下見ゆる。三万八千石なり。

一、大田（太田）

二里半

此間山坂有。岩や勧音御立。少し行大河、舟賃

百八拾文出し。

一、伏見

二里

一、みたけ（御岳）

壱里半

入口左の方に、和泉式部墓有。薬師如来御立。

其より山坂峠三つ有。

一、細久手

三里

二月十八日

笹屋清右衛門。上宿。はたご一朱と百文。

此所の米壹両に四斗二升。

賄 皿「しちみがい」

平「とふふ、かつ」

皿「大こん」

朝 皿「わり干」

平「油上げ、大こん干、いも」

皿「大こん」

一、大久手 壺里卅丁

此処山坂也。茶屋より二里程行。西行法印（法

師）のはかあり。

一、大井 三里半

一、中津川 二里半

一、落合 壺里半

此処稻荷御夢相のこふやく、鹿の八枝の角有り。

従是美濃、信州境

一、まごめ（馬籠） 壺里五丁

此処迄に拾三峠なり。

一、つまご（妻籠）

三月十七日（新暦）

二月十九日（旧暦）

大野屋孫左衛門泊り。中宿。壺朱と貳百文。中

食取り。

賄 皿「生が、むきみ」

平「とふふ、かつ」

皿「大こん」

朝 皿「わり干」

平「大こん干、いも、油上げ」

皿「大こん」

一、みどの（三留野） 壺里半

一、野尻 二里半

一、須原 二里

此処より二里半程行、小野の滝、ねぞめ茶屋そ

ば切名物、壺ぜん八拾文。其より拾二丁程行、

一、藪原

二里

左り川ばた下り、浦島太郎つりば旧跡寺有。ね

此処木櫛名物色々有。其より鳥居峠、大峠難

ざめの松、獅子石、まな板石、硯石、屏風石、

洪、雪もあり。

壘石、かま石、腰懸石、坪山景山なり。

一、ならへ（奈良井）

壺里半

一、上ヶ松

三里九丁

此処、重箱、硯ぶた其外ぬりもの色々あり。

二月廿日

一、に井川（贄川）

壺里半

いせ屋伝兵衛泊り。はたご壺朱と百文。

二月廿一日

賄 皿「干子」

おく屋伝兵衛泊り。上々宿。はたご壺朱と貳百

平「とふふ」

文。中食取り。

皿「大こん」

賄 皿「わり干」

朝 皿「ゆわし」

平「にんじん、青な、油上げ」

平「大こん、いも」

皿「大こん」

此間木曾の懸橋有り。

朝 皿「大こん」

一、福嶋

二里半

皿「なす干あい物」

此処公方様御関所、山村甚兵衛殿七千五百石城

此処にかわるい（皮類）多くあり。

下也。

一、本山

二里

一、宮の越（宮の腰）

壺里半

一、せば（洗馬）

三拾丁

追分 右は中山道

左は善光寺

一、郷原

壺里半

朝 皿「きりいか、ひじき」

平「とふふ、ゑび」

一、村井

壺里半

皿「大こん」

一、松本

壺里半

右は六万石松平丹波守城下、随分宜敷所也。手

此所立峠とて六拾四曲大峠誠に難渋なり。山上に茶屋壺軒あり。

拭多く出る。

一、青柳 三里

一、岡田

壺里

此処切通しの石山有。坂東八番百たいの勧音様御立。

此所に岡田峠連大峠あり。

御立。

一、刈屋原(刈谷原)

二里

一、おみ(尾見) 壺里

一、あい田(会田)

壺里拾丁

此処より馬場峠連大峠なり。かしわ餅名物処あり。火打石名所なり。

二月廿二日

米屋与右衛門泊り。上々宿。はたご壺貫文。中

一、桑原 二里拾六丁

食取り。茶菓子いだし。

一、稻荷山 式拾丁

賄 皿「ゑび、とふふ、大こん」

一、おいわけ 壺里

平「ねぎ、焼玉子、つきこん、にんじ

追分 右は江戸

ん」

左は善光寺

一、丹波嶋

貳里

一、柏原

二里

此間に丹波川迎大川有。舟渡の処舟橋に相成、

一、野尻

壹里

舟拾七さう、其上へ板渡し候なり。はし賃七拾

右の方に野尻池とて水海有。左の方大山四つ見

五文なり。

ゆる。至て雪深き所也。

一、善光寺

壹里拾八丁

従是越後国

二月廿三日(旧曆)

此間に川有。橋賃五拾文出す。

三月廿一日(新曆)

一、関川

壹里

ふぢや平左衛門泊り。上宿。中食取り。はたご

一、小田切

壹里

貳朱。

一、大田切

壹里

賄 皿「ます」

一、関山

壹里

平「いも、大こん、ゑび」

三月廿二日(新曆)

皿「大こん」

二月廿四日(旧曆)

朝 皿「きりいか」

村越や惣兵衛泊り。上宿。はた「ご」書き落

平「とふふ」

とし)九百文。中食取り。

皿「青な」

賄 皿「塩引」

酒壺弁に壺貫文。

平「いも、油上げ、ふき」

一、むれい(牟礼)

三里半

皿「大こん」

朝 皿「干大こんす」

平「とふふ」

ちやく「つけもの」

一、式本木

壱里

一、荒井

二里

此処宜敷宿也。

一、高田

二里半

右は拾二万石榊原式部少輔殿城下。雪日本一深き処なり。町長さ壱里程もあり。

一、春日新田

二里

此処より雪はなし。

一、黒井

壱里

一、片町

二里

一、柿崎

二里

二月廿五日（旧暦）

三月廿三日（新暦）

ますや弥兵衛。中宿。壱貫文。

賄 皿「なます」

平「はんぺん、牛房」

皿「大こん」

朝

皿「たら」

平「とふふ」

皿「大こん」

一、初崎

壱里半

此間米山峠沖大に難渋、小崎取合九つ越へる。

一、鯨波

三里

一、柏崎

壱里

一、宮川

三里

一、しる谷（椎谷）

廿四丁

此処馬市の立処なり。

一、石地

二里

一、出雲崎

壱里

二月廿六日

大さきや権左衛門泊り。中宿。壱貫文。中食取

り。

一、山田 二里

一、寺泊り 貳里

此処迄はまべにて砂道悪き処、大に難義仕候。

其より峠有。

一、弥彦 三里

此処に弥彦大明神御立。末社多し。大社也。

一、岩室 壹里

一、赤塚 三里

一、内野 二里

三月廿五日(新暦)

二月廿七日(旧暦)

大さきや太七泊り。上宿。九百文。中食取り。

二月廿八日

一、新潟 三里

秋田や清六泊り。二朱と貳百文。

右は此処五つ時着いたし、白山社参詣いたし、

緩々逗留仕、見物或は買物等いたし、但し高直

なし(「なり」の誤記か)。是より木崎迄舟にて

行べし。

一、松ヶ崎 三里

此処舟にて詠め申候。

一、木崎 二里

一、堀割 壹里

一、柴田(新発田) 二里

三月廿七日(新暦)

二月廿九日(旧暦)

材木や乙次郎泊り。大極上々宿。九百文。中食

取り。

賄 皿「かれない」

平「とふふ、ねぎ」

皿「大こん」

(朝) ぢやく「青な、干大こん」

平「いも、丸ふ、もやし」

皿「大こん」

平「もやし、丸ふ、いも」

右拾万石城下也。諏訪大明神御立。大社なり。

皿「おろし」

一、かぢ(加治)

壹里

一、川口

半道

壹万石城下。入口川有。はし賃七拾文出し。

此処舟渡し五拾文。其より高津峠。

一、菅谷

壹里半

一、尾打瀬

壹里

此処不動明王御立。大社なり。池にたにしはなし置也。

一、沼

壹里

一、堺

二里

一、はた(畑)

壹里

一、くわい(歙江)

二里

此処大里峠とて大峠。嶺上境東米沢領分なり。

一、関

壹里八丁

一、玉川

二里

三月廿八日(新曆)

此よりかやの峠。

三月朔日(旧曆)

一、足水(足野水)

壹里

中橋や庄吉。上宿。壹貫文。中食取り。

此処朴木峠。大峠なり。

賄 皿「かれい」

一、小国町

壹里八丁

平「とふふ、かつ」

三月廿九日(新曆)

皿「大こん」

三月二日(旧曆)

朝 皿「塩引」

柳屋太郎兵衛。九百文。中食取り。



賄 皿「糸魚」

平「ぜんまい、まいたけ干」

皿「な付」

朝

一、四百式拾文

中食代

一、壹歩貳百文

かれい拾疋

一、三朱五百文

うんさいたび（雲齋足袋）

一、壹朱と四百文

女たび

一、壹貫文

のり

一、九百五拾文

さとふ代（砂糖代）

一、五百文

こんへい（金平糖？）

一、壹朱と百文

油紙

一、七拾文

わらじ壹束（草鞋壹足）

一、百五拾文

二はし賃

一、七拾文

中食代

一、八十文

灯明御守

一、九百文

はたご

一、五拾文

かみ壹折

一、六百文

ま□□本

一、二朱

かみいひ（髪結）

一、百三拾文

たばこ代

新潟より小遣口

一、百五拾文 　　かみゆへ賃（髪結賃）

一、五百式拾五文 　店酒代

一、三朱と三百文 　こんたび（紺足袋） 　　壹つ

一、貳朱と百文 　　女同断

一、貳朱と二百文 　風呂敷

一、貳朱と六百元 　同断二枚

一、壹歩四拾文 　　びん付（鬢付）

一、四百五拾文 　　くわし代（菓子代）

一、壹歩壹朱 　　めりやす

一、六百四拾文 　　舟はし賃（舟橋賃）

- 一、五百五拾文 すぎあぶら五つ
- 一、式百三拾文 はみかみ
- 一、百七拾文 舟はし代
- 一、八拾文 中食代
- 一、壹貫八百七拾五文 たび壹束(足袋壹足)
- 一、壹両貳分式朱 から筥壹本
- 一、壹朱百文 ぞふり壹束(草履壹足)
- 一、壹歩 さとふ(砂糖) 壹斤
- 一、貳歩壹朱 柳ごふり(行李)
- 一、百五拾文 案内銭

二月八日(播磨永池に宿泊の日)より遣口

- 一、貳百四拾文 舟ちん
- 一、百八十文 中食代
- 一、八十文 わらじ
- 一、三朱と四百文 たばこ入
- 一、九百文 はたご
- 一、貳百文 そば切り
- 一、貳百八拾文 中食代
- 一、壹歩 上気船代(蒸気船代)
- 一、貳歩三朱 めりやす
- 一、壹歩貳百十文 風呂敷五つ
- 一、貳朱と四百文 きせる壹本
- 一、壹朱 中食
- 一、二歩貳朱 大芝居料
- 一、百文 みかん代
- 一、壹歩貳朱と三百文 大坂はたご
- 一、四十文 たばこ
- 一、四百文 中食代
- 一、八十文 舟ちん
- 一、五拾文 御守分
- 一、四百文 中食代
- 一、貳百四拾文 小遣

- |  |            |            |           |       |
|--|------------|------------|-----------|-------|
|  | 一、貳歩三朱と四百文 | せともの代      | 一、百五拾文    | 案内せん  |
|  | 一、四百五拾文    | 白こんぶ       | 一、百七拾五文   | 駄賃せん  |
|  | 一、七十文      | しりかみ代      | 一、三百三拾文   | 中食代   |
|  | 一、百五拾文     | 案内せん       | 一、九拾文     | 酒肴代   |
|  | 一、壹歩       | 扇子四拾本      | 一、壹貫文     | 旅籠    |
|  | 一、貳貫百文     | 同扇子代       | 一、貳拾文     | 御守分   |
|  | 一、壹両壹歩     | さんとく(三徳)壹つ | 一、七拾文     | はしせん  |
|  | 一、壹歩       | 守札分        | 一、百六拾文    | 中食料   |
|  | 一、五百文      | あぶらがみ      | 一、壹朱と三百文  | 旅籠    |
|  | 一、三朱と百五拾文  | 白木綿        | 一、壹貫百貳拾五文 | 半ゑり代  |
|  | 一、壹歩三百文    | 唐風呂敷七枚     | 一、百三拾文    | 舟はしせん |
|  | 一、壹朱       | せんたく代      | 一、百六拾文    | 中食代   |
|  | 一、七拾文      | 同断         | 一、貳歩三朱    | 玉代    |
|  | 一、貳百文      | 白こんぶ       | 一、四十文     | いも    |
|  | 一、貳百九拾文    | 中食料        | 一、壹朱と三百文  | はたご   |
|  | 一、二朱と三百文   | きせる代       | 一、百五拾文    | かみゆい代 |
|  | 一、三貫文      | 京はたご       | 一、百六拾文    | 中食代   |

一、六拾文	たばこ代	一、壹貫文	はたご
一、百八拾文	舟ちん代	一、百六拾文	中食代
一、五拾文	くわし	一、百文	御守代
一、百八拾文	中食代	一、七拾文	はしせん
一、百文	わらじ代	一、貳朱	はたご
一、貳百四拾文	中食代	一、貳百文	わらじ二束(二足)
一、百五拾文	はなつけ	一、百文	たばこ
一、六拾文	かみ壹折	一、五拾文	はし賃
一、壹朱と貳百文	はたご	一、八十文	中食代
一、百文	唐がらし	一、百五拾文	同断
一、百三拾文	わらじ	一、九百文	はたご
一、七拾文	中食代	一、百文	そば代
一、五百三拾六文	くし五枚代	一、壹貫文	はたご
一、壹朱と貳百文	はたご	一、百七拾文	中食代
一、百八十文	中食代	一、七拾文	はし賃
一、九十文	わらじ	一、壹貫文	はたご
一、五拾文	くわし	一、百貳拾文	酒代

一、八十文 中食代

一、壹貫文 はたご

一、五十文 わらぢ

一、九拾文 酒代

一、五百三拾文 かんすゞ壺つ

一、二朱貳百文 はたご代

一、一貫文 はたご

一、貳百文 ところろ代

一、百四拾文 酒代

一、九百文 はたご

一、五百文 手拭壺つ

一、壹歩貳百文 ゑづ (絵図)

一、七百五拾文 風呂敷三枚

記

正月廿日、外宮、内宮参詣。此日四つ頃迄大雪降り、朝熊だけへ登りの節は晴天、此時八つ頃とふ

ゆふいため、同廿一日氣持悪く、大になづみ申候。

二月十一日、芝居場におゐて、目前(目まい)仕、半時程難儀仕申候。い申候刻限は八つ頃。

貸方

正月廿日

一、二歩 勝次

一、壹貫貳百文 返済 同人

送り物

一、 も、引壺束

一、 かんざし三本

一、 よふじ拾本

一、 はみがき壺箱

一、 お白ひ式箱

一、 ゑづ (絵図)

一、

えまき

一、壹歩

とふゆふ(桐油) 壹枚

一、

鳳来寺札拾貳枚

一、壹貫百文

はたご料

一、

古峯ヶ原札八人へ

一、貳百七拾文

中食料

一、百六拾文

納豆餅代

廿日

一、壹貫貳百五拾文

泊り

一、壹歩

大樽仙右衛門餞別

一、八拾文

はしせん

東町に於て七左衛門遣ひ

一、貳百十文

中食料

一、百文

はらじ壹束(草鞋壹足)

払口記

一、三朱と五百文

らしやぼふし壹つ

一、壹貫貳百文

旅籠代

一、貳百三十文

つき壹尺

一、五百文

天札切替

一、壹貫百文

旅籠

一、八十文

手うら貳束

一、十五文

筆ぼぐ

一、七百七拾文

真田七尺

一、壹朱と貳百十二文 店酒分

一、四百四十文

昼食料

一、五拾七文

酒代

一、九百文

旅籠料

一、百文

だんご

一、貳十四文

橋賃

一、拾五文

橋せん

一、八十文

中食小遣

一、貳百四拾文

中食料

一、四百文	馬乗賃	(「ん」書き落としか)	一式
一、式十文	橋せん	一、五十文	灯明代
一、拾五文	同断	一、拾五文	筆墨代
一、五拾文	菓子	一、百六拾文	小遣代
一、八百五拾文	旅籠代	一、百貳拾文	わらぢ代
一、八十文	御汁壺つ	一、八十文	小遣とふふ代
一、貳百文	小紙壺折	一、百三拾文	わらぢ壺東(壺足)
一、百文	はしせん	一、貳朱と貳百十文	落物古峯原
一、三十文	あめ	一、五十文	御札分
一、百文	はらじ壺東(草鞋壺足)	一、三百貳拾文	中食代
一、壹貫百文	旅籠	一、百文	酒代
一、百六拾文	かみ結賃	一、百十文	わらじ
一、百貳拾五文	酒代	一、貳百文	わらじ壺東(貳足)
一、壹貫八百三拾文	はたご代	一、四百四拾貳文	山役せん
一、百貳拾五文	酒代	一、貳百文	参せん
一、八十文	ぞふり壺東(草履壺足)代	一、百七拾五文	中食料
一、五百文	日光見物案内銭山役せ	一、壹貫文	旅籠代

一、百三拾文	酒代	御□ひ	色々
一、八十文	舟ぢん (舟賃)	はみがき	
一、三百四拾文	中食料	一、貳百四拾文	中食料
一、貳朱と百文	旅籠	一、貳百文	も、引駄ぢん
一、四百文	人力車代	一、三貫五百三拾九文	ゑづ代 (絵図代)
一、貳百六十文	中食料	一、貳歩三朱と四百拾五文	も、引仕立賃共に一
一、百文	たばこ		式
一、壹朱と百文	ぞふり壹束 (草履壹足)	一、五百九拾三文	品物送駄賃
一、貳百四拾文	中食料	一、三歩貳朱と百六拾五文	メリヤスも、引
一、貳朱と五百文	たび壹束 (壹足)	一、二両二歩	とんび
一、八十文	見物料	一、貳百文	もぎ紙代
一、五十文	湯ぢん (湯賃)	一、百文	ろふそく代
一、壹歩と四百文	江戸旅籠	一、壹歩壹朱	上騎車 (蒸気車) 賃錢
一、貳百五拾文	酒壹合	一、三百文	案内錢
一、三朱	菓子料	一、貳朱と百文	はたご
一、壹朱	茶代	一、貳朱	異人ゑづ (絵図)
一、壹歩と三百文	かんざし	一、三百文	中食料



一、四拾貳文	案内せん	一、百五拾文	舟ちん
一、八百五拾文	泊り	一、四拾文	はしせん
一、四拾文	いも	一、三百四拾文	酒吞入料
一、五百五拾文	片旅籠	一、九拾文	紙壹折
一、三百五拾七文	酒代	一、九百文	泊り
一、百文	舟ちん (舟賃)	一、九拾文	中食代
一、貳朱	旅籠	一、百六拾文	そば代
一、百五拾文	中食料	一、一分貳朱	酒吞料
一、六拾四文	橋銭	一、壹貫文	泊り代
一、拾五文	づゑ (図絵)	一、四拾文	はしせん
一、貳百文	かみ結代	一、貳十文	同断
一、四拾文	呼子壹つ	一、四百文	中食料
一、貳百十文	酒代	一、百貳拾文	船ちん
一、貳百七拾文	中食代	一、九百文	旅籠
一、壹貫文	泊り代	一、四拾文	わらび餅
一、百三拾文	酒吞入料	一、十五文	あめもち
一、貳百八拾文	中食代	一、四百文	中食分

一、十五文	はしせん	一、九百五拾文	旅籠代
一、壹貫百文	旅籠	一、百貳拾文	わらじ
一、百貳十文	酒代	一、三百貳拾五文	中食代
一、五十文	とこの	一、百十文	わらじ
一、壹朱	店酒分	一、一貫貳百文	はたご
一、四拾文	舟ちん (舟賃)	一、三歩三朱	もめんしほり壹反
一、貳百三十文	中食料	右へ手拭壹つまけ	
一、壹貫文	はたご	一、貳百五拾文	中食代
一、百文	舟ちん	一、百五拾文	なまずやき
一、三十五文	橋ちん (橋賃)	一、百五拾文	菓子、御汁壹つ
一、四百文	中食代	一、百文	御札
一、百十文	わらぢ	一、四百文	舟ちん (舟賃)
一、三百八十文	御守札代	一、壹貫百文	はたご代
一、七拾文	わらじ	一、貳百四拾文	中食代
一、三十文	舟ちん	一、壹朱と貳百文	あぶら紙
一、貳百八十文	中食代	一、百文	しりがみ壹折
一、四拾文	あめ	一、百九十文	つき壹尺

一、貳百文	かみゆひ代	一、百四拾文	舟はし代
一、壹貫百文	はたご	一、百六拾文	中食
一、百五拾文	はしぢん(橋賃)	一、貳朱と貳百文	いぶきふところ入
一、貳百三拾文	中食代	一、百文	わらじ
一、四百文	車乗代	一、貳拾文	弓引代
一、壹兩貳朱	太夫様落物分	一、八百貳拾五文	はたご
一、貳朱	大はらひ代	一、五拾文	はしぢん(橋賃)
一、貳百文	同断巻つ	一、四百文	片はたご
一、六拾文	道中大祓	一、百文	わらじ
一、五拾文	あんころもち(餅)	一、壹朱	とうの子
一、六拾文	くわし	一、壹朱百文	はたご
一、百文	茶代	一、貳百文	わらじ
一、三百十五文	万金丹	一、四百文	中食代
一、五拾文	案内へ酒代	一、貳朱	はたご
一、百文	わらじ	一、六十文	あめ
一、壹歩と三百文	こふり(行李)壹つ	一、四百文	中食代
一、百文	御見□分	一、五十文	案内せん

一、貳百四拾文	御守代	一、百文	御守代
一、四拾文	せんべい	一、一朱と三百文	九重御守
一、壹歩	御むさう墨	一、百五拾文	仏木
一、壹朱と四百文	はたご	一、貳朱	落物代
一、三百文	中食代	一、百文	舟ちん
一、五拾文	案内せん	一、壹貫貳百五拾文	はたご分
一、壹貫文	はたご代	一、貳百四拾文	わらじ三束(三足)
一、八十文	わらじ	一、百五十文	中食料
一、四百文	中食代	一、貳百八拾文	舟ちん(賃)三ヶ所分
一、五十文	もち(餅)	一、七拾文	びん付代
一、三十文	はしちん(橋賃)	一、百貳拾文	酒代
一、九百貳拾文	はたご	一、貳朱	はたご
一、五拾文	案内ちん	一、三朱	舟ちん
一、百十文	舟ちん	一、百文	もち
一、四百文	中食代	一、四百文	御守分
一、百貳拾文	わらぢ	一、百文	酒代分
一、九百五拾文	はたご	一、貳百十八文	酒代

一、式朱 はたご 一、三十文 もち(餅)

一、百六拾文 中食代 一、式百五拾文 酒代

一、百六拾文 わらじ二束(二足) 一、百代 菓子代

一、百文 わらじ壹束(壹足) 一、四百四拾文 芝居木戸銭

一、九百文 はたご 一、壹朱 中食代

一、壹朱と三百三拾文 御神酒すゞ代 一、八十文 わらじ

一、式朱と三百式拾文 守箱、油がみ、包共に 一、壹朱式百文 たこ代

一式 一、百文 つけもの

一、式歩 御守初尾 一、壹朱三百十五文 はたご

一、式百文 見物代

一、八十文 わらじ代

一、壹朱 片はたご 一月

一、壹歩二朱 舟ちん(舟賃) 一、壹歩 城下矢来 橋本吉四郎母

一、八十文 ゑづ(絵図) 壹枚 一月十一日

一、式百文 かみゆへちん(髪結賃) 一、壹朱 田沢村 高橋助左衛門

一、五十文 たばこ 同月十二日

一、八十文 かみ壹折 一、わらじ式束(式足) 与左衛門隠居

錢別記(錢別記)

同月十二日

一、壹朱

船山嶋次

一、壹歩

医王寺

一、壹朱

高橋孝左衛門

外に御守頂戴仕申候。

一、五百文

伊藤太左衛門

同月同

一、壹朱

角石六郎兵衛

一、壹朱

酒丁 菊地熊太郎

一、式朱

伊藤金五右衛門

同月同

一、壹朱

市川藤介

一、氣付壹貝

西原医者 渋谷勝四郎

一、壹朱

市川徳右衛門

同月十五日

一、五百文

儀右衛門

一、壹朱

柴引 渡部五郎右衛門

一、一歩

副戸長 井上卯右衛門

一、

広河原 利喜助

一、式朱

温井 伊藤孫右衛門

一、式朱

船山 藤兵衛

一、壹歩

三弥

一、式朱

法泉院

一、壹貫五百文

高橋三次

一、式朱

井上喜左衛門

鈴木初次

一、六百文

高橋勘七

井上吉蔵

一、式朱

伊藤伝五郎

右は踊中間五人へ

一、壹朱

須久庄右衛門

一、壹朱

金子与左衛門

一、四百文

高橋勘右衛門

一、壹朱

永沼久左衛門

一、四百文

同 久助

一、壹朱

御廟丁後藤文七

一、壹朱

田沢村我妻惣右衛門

一、貳朱

矢来山田八郎

一、壹朱

芳右衛門

記

一月十七日

一、拾両

文七より

越中富山茶屋

午のとし

嘉藤屋善七

申のとし

同 久助

メ

同年

高堂屋次介

メ

記

二月廿一日

一、壹両

勝次にかし

同月同

一、貳百貳拾文

くし二枚同断

二月廿九日

一、壹歩貳朱

同断

